

証の雅集

No. 432

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI



麻生路郎☆主宰

五月号

1102

川柳雑誌社主催

6月本社句会

待機 口絵 廻り 面接

本社五月句会

新緑のすがすがしい気分を
そのまま句箋にうつしましょう。

日時 五月十日(金) 午後六時
会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「助言」(二句) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半〆切り)

「隣室」(三句) 松江梅里選

「スタイル」(三句) 金井文秋選

「人形」(三句) 橘高薫風子選

席題 三題(当日発表)

柳話 北川春集

呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞
会費 百円

幹事 紫省・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・すゝむ・薫風子・柳

宏子・丹遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切五月八日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪(671)六〇八一



川柳 川柳まつり

特別課題

「先見」

(2句)

麻生路郎選

(〆切・六月末日日本社着便句)
(箋裏面に支部名雅号明記)

日時 7月7日(日) 午後一時

会場 北極星

司会 西尾 榮

開会の辞 川村好郎

挨拶 中島生々庵

柳話 麻生路郎

講演 交渉中

兼題 「本心」(三句) 若本多久志選

「円満」(三句) 松江梅里選

「風変わり」(三句) 清水白柳選

「星」(三句) 正本水客選

席題 当日 三題発表(各題三句)

★特別課題「先見」発表 麻生路郎選

呈賞 ☆各題天地位人・各題天位から路郎選により不朽洞賞

★特別課題「先見」発表 麻生路郎選

★特別課題「先見」発表 麻生路郎選

余興 (選って発表) 有志 諸家

閉会の辞 吉田圭井堂

会費 百五十円(参加者全部におみやげ進呈)

懇親宴 会費六百五十円(同会場において5時半から7時までの予定)

★投句だけの方は郵券五十円同封(〆切六月末日)

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



中馬慶氏大阪市長に当選

おてんとさま見てください我等の新市長

前大阪市長中井光次氏へ

時の鐘これからうちで聴かれたし

選 畢

ちちばばも一票いれた顔になり

無 罪 (二句)

無罪となりて一ぱいの水

恋がふっ飛んだぐらいではおさまらぬ余生

無意思とはおそろしきかな人波の

川柳雑誌五月号目次

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘

不朽洞句帖……………麻生路郎：(3)
睡眠の話……………中島生々庵：(18)
川柳初篇研究 (二)

川端柳風・高須啞三味・前田喜代人
柘植金治・清博美・藤井和雄
丸十府・岡田甫……………(12)

不朽洞会総会……………橘高薫風子：(32)
名句と難句……………麻生路郎：(4)
ほめた句ほめられた句……………鳥雀・水客・圭井堂：(16)
伝説創作委員会……………東野大八：(15)
ある選者の場合……………直原七面山：(21)

リレー句評……………薫風子・白星：(25)
東岸・柳宏子……………(25)

★現代柳人録……………(27)
★川柳書架……………(32)

食塩少々……………本多柳志：(20)

沖繩紀行……………若本多久志：(28)

★東天紅氏のこと……………(24)
★不朽洞の人々……………雄々氏の巻……………(39)

大万川柳「大阪弁」発表……………(31)

★

川柳塔……………麻生路郎選：(6)

同舟近詠……………諸生路郎選：(11)

近作柳檣……………北川春郎選：(20)

金泥集……………麻生霞乃選：(40)

各地柳壇……………(41)

★柳界展望……………(38)
★不朽洞会から……………(39)

入門講座……………清水白柳……………(34)

一路集「口下手」……………清水白柳選……………(36)

「善意」……………後藤梅志選……………(37)

「腕組み」……………小浜牧人選……………(46)

★柳樹室……………(46)



川柳

名句と難句

麻生路郎

初恋のふるえて燃えて納屋の隅

〔四八七〕

(喜由)

ロマンティックな句だが、ローティーン
の初恋の心ときめきを忌憚なく描き出し
ていると思う。表現上、音感の柔かくスラ
スラと淀みもなしに一句を構成している手
際は凡手ではない。

今どきのドライなローティーンなどに、
この句のような情景があるか、どうかは知
らないが過去の初恋を詠んだものとうけと
つても一向差支えないと思う。

〔四八八〕

祇園さん春の埃に艶めいて

(白香)

京の祇園さんといえはすぐに、つなぎ団
子や舞妓のだらりの帯などが、春のアトモ
スフェアをただよわしてくる。それが
「春の埃りになまめいて」という詩感とな
ったのである。「祇園さん」という親しみ
のある言葉も、そうした情緒を盛りあがら

すにふさわしいではないか。

〔四八九〕

ひげ面もステキと見舞の娘に言わ
れ

(素身郎)

宅で寝込んでいるのか。入院しているの
か、そこまでは判らないが、ベッドで話の
出来る程度の病人らしい。見舞に来た娘
も、心おきなく話の出来る程度の娘で、特
に愛人というわけではないらしい。その見
舞によって一時的に病室を明るくさせてく
れる娘なのであろう。しかし、
「ひげ面もステキだわ」となれなれしく言
えるところから想像すると、この病人に好
感をもっていることは確だ。こうした若い
女性の言葉を、既に恋が芽生えているとう
けとるのは早計かも知れない。

〔四九〇〕

お寺さんスイスイスイと奥へ行き

(いわを)

祥月命日なのであろう。檀那寺の僧侶が
やって来た。

この頃の坊さんは大ていスクーターでやっ
て来るが門先きでスクーターにカギをかけ
ると、サッサと奥へ通る。

この句は僧侶の動作を、目のあたりに見
るように描写している。「スイスイスイと」
いう措字がいかにも適切で、この句をいき
いきとさせている点を称えたい。

〔四九一〕

駄菓子屋の内からみてる細雪

(徹也)

この句を読むと、ドラマの一場面を見て
いるような詩情が湧くのは私だけではない
だろう。

駄菓子屋の店の間から細雪がチラチラと
する寒む空を、黙々と眺めているみすぼら
しい老嫗の姿がしのばれるではないか。

〔四九二〕

五十年ス力屁だったと都落ち

(晃)

人生のきびしさを、命抜な表現でまとい
たもの。中七の「スカ屁だったと」の措字

に少しの不潔さも感じないし、しかもこの
中七が句の生命線をなしている。

都落ちをした友人がオレの五十年はスカ
屁だったという悟りにも似た一言は、ユー
モラスと言うよりも、あまりにも悲惨であ
る。

〔四九三〕

✓子に買った漫画車中で読み終り

(草右)

郊外に住む子ぼんのうの彼は、毎日のよ
うに、子どもに土産を買って帰るのが例
となった。今日は漫画本を一、二冊求め
た。早く帰ってよろこばしてやろうと思
うと、列車の速力がいつもより遅いよう
だ。そこで彼は革鞆から漫画本をとり出
して、子どものように読み耽ったのである。
こんなところからでも句は拾えるとい
った句だ。

〔四九四〕

北陸豪雪

積雪一丈その下の金魚の朱

(薰風子)

見たままの句であらうが、豊かな詩的な
感覚が一句を覆っている。「金魚の朱」が
やけつくように作者の眼を射たのである。
雪の純白と金魚の朱の対照も鮮やかだ。た
だそれだけの句にしても捨てがたいもの
がある。

〔四九五〕

応接間のつもりの喫茶つづれたり

(アト)

人生のきびしさを、命抜な表現でまとい
たもの。中七の「スカ屁だったと」の措字

この句には若さを失うまいとする中年の悩みが、ティールームを通してうかがわれるではないか。

喫茶店を自分の応接間のように思って、毎日のように誰れ彼れと会っていた、その喫茶店が突然閉店したので、心のどっかに空虚が出来たことを感じたのである。そうした心理を巧くとらえている。

〔四九六〕

仲居して子の夜更かしに気がつかず

(清生)

子を産んだ顔もいないが、大いの仲居は子持仲居だ。この子ばかりは妾ひとりて立派に育てて行きますという母性愛は人一倍に旺盛であるが、さて現実にはなかなか容易ではない。職業柄夜遅く帰宅するので、朝寝をしなければならだが持たぬ。そうした環境で子どもの教育が満足に出来よう筈がない。こんなところに非行少年や非行少女が育ったからといって社会の罪という外はないだろう。

この句など、仲居の生活のホシの一部分をのぞき見たのに過ぎないとも言えるが、福祉国家をねごと人たちの味読を煩わしい句だ。

〔四九七〕

十二月貸して取れないのがなぐり

(甲吉)

この句。貸したのが十二月でなくて、なぐったのが十二月である。貸したのはそれ以前である。十二月には、こちらで要る金

だが、十二月にはキツと返してくれるか、キツと返しますと堅い約束のもとに貸したのである。

それが返済の時期が来ても、言を左右にして返えしてくれないので、正直者の短気な貸主の方がなぐったのである。よくある例だ。

なぐるところまで昂奮するのも、十二月の深酔さだ。穿ちの面白さがそこにあると

〔四九八〕

うれしいじゃないか孫から年賀状

(好郎)

めっきり感激が少なくなった老人にも、孫の年賀状を手にしてワクワクしたことであらう。「うれしいじゃないか」の措字が

孫にはおもちゃ的存在が多分にある。子どもたちが成長してしまふと親の自由にならないところから、猫を可愛がるような意味でも愛情が孫の方へ移るものだ。老人心理を率直に表白している句だ。

〔四九九〕

死亡零怪我は幾万ありとても

(野迷路)

都市の交通事故は日々果てしなく続く。警察本部が死亡ゼロを声を囁らして叫けうと、その対策に懸命の努力を払おうと、効果の見えぬ現状だ。

この句の目指すところは怪我は幾万あるとしても、そんなことには頓着をせずし

死亡ゼロばかりのぞんでるようにうけられる。なせもつと怪我人の減少をはからないのだと叫んでいるのである。怪我人が幾万もあるとは思われないが、死亡ゼロと対照して大げさに叙したのは誇張法によって作句されたもので、「怪我は幾万ありとても」は日清戦役の軍歌、「敵は幾万ありとても」の文句取りの句である。

〔五〇〇〕

オールドミスジュースにしたが気に入らず

(可住)

ドヤドヤとみんなでバアへ這入った。一列にコップがならんで、なみなみとビールが注がれたが、ひとりオールドミスの前にはジュースが注がれたのであった。

「アラ、わたし」

と言った、オールドミスの顔は不満そうだったと言っているのである。

〔五〇一〕

無情とや電話の主がもう轢かれ

(代仕男)

頗々たる交通禍には何んとかならないものかと、ノイロ一ゼ気味になるのももつともだ。余所の出来事などとは思ってられない。

「エッ、あの方が。ダンブカ」

「酔っぱらい運転の上に、無免許だそうです」

「ホントにお気の毒ですね。いんま先き、電話でお話しし

たばかりですのに」

「判らないのですよ。全く無情とも何んともいいようのない出来事だと思います」

こんな会話が交わされる社会の一コマの描写である。

〔五〇二〕

戦い取るいやな声聞く十二月

(晃康)

歳末の十二月に、戦い取るという声がするので、何んという哀れな人たちではないか。木枯の吹きすさぶ季節に、声を囁らして叫ぶ彼等の醜体は何んだ。働いた報酬を集団でなければ戦い取れないような仕事に、いつまで恋々とブラ下っているのだ。男ならいさぎよく去れと言いたいのである。

この作者にかぎらず、戦い取る—という言葉そのものに、レジスタンスを感じる人々はかなり多数に存在すると思う。



結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣裳も
豊富にそろえております ● 6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171

川柳塔

豊中市 戸田 古方

卒業式うれしのお辞儀まだつづき
春怨というおセンチをうれしがり

大阪市 市場 没食子

利廻りを云わず多少の株も持ち
飲めぬのでせのない婿やなと思ひ

西宮市 若本 多久志

儲けてることだけ近所知っており
老化現象ですよと医者はとりあわず
納税申告正直にして寂し

沖繩紀行

興亡の歴史を茲に首礼の門

祖国復帰へへんぽんと星条旗

大阪市 正本 水客

ぬくい日を選んで訪ねる電話さる
靴をはく肩のファイト見下され
小人物やなと自分をなぐさめる

隣室で妻の話術を聞いている

高槻市 丸尾 潮花

割り込んで掛けてアカハタ読んでる娘
庭下駄の風情は春の花を踏み

テレビ背にしてお師匠さんと飲み

大阪府 西 いわを

今年からとほける術も心懸け

大阪市 北川 春巢

家族計画に乗って生れたとは知らず

目明き千人の一人と自分では思ひ

相談欄折伏いなす手も教え

ツイマル 羽佐間 柳葉

茶の渋味褒める仲間にもなり

甘すぎた婆夫婦でなすり合い

堺市 吉田 圭井堂

トイレばかり聞かれてバイトうんざりし

棚ぼたの企画をけなすのも歳か

如才なく名刺もねだる術も覚え

防府市 長野 井蛙

風巻いてダンプは触れるものを斬り

成り上り筆を怖れる過去を持ち

岡山县 直原 七面山

眼鏡のちりをゆっくり拭いて主賓席

末っ娘を嫁がせといて書く辞表

政治的理由で市長入院し

見舞品へソロバン弾くのも女

痛で近きはったと二号あわてず

大阪市 西森 花村

階段は驚駭りの仮事務所

家康より父も佐助の方が好き

本当の風邪らし給料日も休み

あの上で昼寝がしたい春の雲

鳥取市 河村 日満

東京にて

東京の風身震いをさせて過ぎ

東京から戻れば冬に舞いもどり

社共統一候補落つ

最下位へ肅と声なき事務所なり

豊中市 足立 春雄

白衣着てまさか奇蹟にたよれまい

倉敷市 木村 千容

金婚祝詠

ウンハイでバランスとった五十年

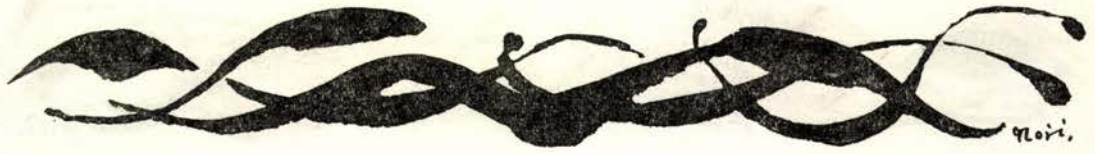
内妻のあわれ告別式でけり

よいことをしていると社宅雀妬き

倉敷市 田垣 方大

表札を雅号で出した冠木門

吊橋を山の娘平地を行く如く



加賀市 野村 味平
景気がいいなとおしゃれうらやまれ

大阪市 真鍋 一瓢

奥伝のミスに木苺逆らわず

孟母三遷子を連れて食う店がなく

脳溢血あいつがかいと猪口をおき

米子市 小西 雄々

失敗をしたわと気軽に墮して来

学力の差を意識している勝ち気

本当に勝ち気と気付く移転の荷

角隠し勝ち気な娘とは見えす

洋酒なら角帽父に負けず飲み

朝おそく男だました歯をみがき

大阪市 山川 阿茶

長生きをしますと云うても気に入らず

ボーイフレンドにシラノのような人が居て

子沢山この子あの孫入院し

人づくり煙たい人も出来ように

大阪市 金井 文秋

月謝だけ儲けるドレス縫い上り

おいしそくに子供が食べるコマージュ

加賀市 那谷 光郎

春や春不精も髯をそつてくる
にせが通りにせが通らぬ九谷焼

大阪市 福井 野迷路
ゴルフ談接木のように入れて来る

岡山市 浜田 久米雄

定年の気持を聞けばあざ笑ひ

退職金で払いきれいな家が建ち

退職の春へ汽笛がよくひびき

岡山市 逸見 灯竿

おほほと笑うて女油断せず

もう過ぎた脱税今日は自慢する

機関車が客車に押され坂を越す

出雲市 尼緑 之助

口だけは達者貧乏神を連れ

深夜業狂人めいた欠伸する

大阪市 水谷 竹荘

招かれて来ても女は手伝う気

かん詰でたべたと書いて妻はるす

鳥取市 杉谷 湖山

内職に坐れば冷えるひざ坊主

だん取りが出来たに聴衆よりつかず

盆栽のようにうちの子育てまい

京都府 大鶴 喜由

志に反し寝むたい夜学の子

いい年をしてと口説きをさえざられ
女とは即坐に嘘の出るものか

花老いはれて蝶々寄りつかず

先客をつまみ出してハートに住まん

責任は大権限は小宮づかえ

晩成型ですとすべった子をかばい

七十の恋は背中を流し合ひ

東京都 山根 白星

舌打ちは衣桁の隅にながき女

吾子もうおとがい襟に埋めるしな

酌所望して妻の眼の意味ありげ

ベッドまで抱きスコッチを口移し

税務署で地主のネクタイひん曲り

これはこれは車体の下の社長さん

奈良県 飯降 白香

及落が一点の差とは恐しや

人柄を買われて葬儀委員長

岡山県 福島 鉄児

功なり名遂げに葬式とはなりぬ

屋上も春です恋が芽生えかけ

B G がひとあし早く春にする

鳥取県 青木 遊星

豪雪がラッセル車庫にとじこめる

年増にも似て豪雪の厚化粧

三度目のデートは中華料理にす
岡山市 服部 十九平



子沢山整理筆筒に名が貼られ

西宮市 若林 草右

聴診器すてて天寿の母送る

高槻市 山田 季賛

一階のアパート早くも蠅の遠慮せず

のんびりと寒鰯を釣る人もいる

岡山県 田村 藤波

正札で儲け半額でももうけ

春を待つ炬燵の上の伊勢暦

玉島市 臼井 三林坊

捨てられた犬も四月の陽を浴びて

先着順百名様に引っぱり

そう云えば埃りで死んだのを聞かず

仁術どころか経営学博士なり

茨木市 下山 清潮

ドドンパに菊正の味判るまい

台風一過友情一番乗りをする

鼻の差で貰った金でカツでのみ

児島市 本田 恵二朗

眠られぬ夜のとばりの悪魔めく

トルコ風呂土産話が一つふえ

鳥取市 森本 法泉子

勘忍どすえで京都はことが済み

京の街竿竹売って歩く人

急行の売子地声になつて掛け

堺市 高崎 雄声

ちり紙さえ色が黒うて嫌われる

男の子女の子赤を奪い合い

ミリキとか言うて昭和の膝小僧

勇気と決断何や下着の着換かい

島根県 藤井 明朗

新婚の室から猫がすごすご出

残り酒幹事予算に入れて居り

社員とは名のみ奥様の用事もし

岡山県 永松 東岸

五分刈りの目にはきたない櫛に見え

百姓にとつては東京遠いとこ

ボマードの匂いへ袈裟をかけて来る

点々と田へ人がいる暖かさ

友引の前夜は住職さんも酔い

倉敷市 野田 素身郎

風邪ぐらいなんだと老いてから云わず

甘党で安心できる運転手

本箱に本より薬並ぶ歳

大阪市 不二田 一三夫

ラジオ大阪「歌は甦える」執筆

枯れすすきあゝの頃はくも恋に泣き

与えることを知らず敬遠されはじめ

貫録は名刺に肩書入れてなし

青屋市 丸川 初甫

背の子へ息通わせている寒さ

親子して職場の空気持ち帰り

岡山県 池田 古心

貧乏と云う人が先にテレビ買う

退屈な日は折伏も聞いてみる

小平市 石居 高志

春宵一刻価千金飲むとする

久々の夜行寝るより飲むつもり

人の世の総てを知った顔で老い

雑沓のこれみな生きる姿なる

大阪府 早川 清生

踊り子に返事も書かず寝る疲れ

運転手故郷に瘦せた田と母と

成金のはじめは後家をたらしこみ

日向にて

神の裔崖耕して稗を播き

推葉民家

中世の詩と翳よどむ土間の隅

葉師寺

美女つれて吉祥天の前に立つ

大阪市 西出 栄

電化してお出まし多き母となり

湯どうふをゆつくり待つも京の味

免許証とらせば黙って他社へ行き

鼻かむも心してかめ子起きる



アパートに住んであたしは元華族
宿望のババにこたえて男の子

堺市 辻 圭水

泣きどころ知ってか赤ちゃん泣きやまず

年下の教師へ親がかしこまり

加賀市 中 松 恒雄

片栗粉に似た感触の雪を行く

雪喧嘩ここはあんたのこの雪

栄枯盛衰春雨に消され行く雪

残雪の汚れ敗残兵に似て

べんちゃらを尽し女中に居て貰い

大阪市 児島 与呂志

看護婦をくどきたい程いえて春

チビた下駄はいて座談会から戻り

入学れたを運転手にまで聞かせたく

西宮市 小 浜 牧人

雪の日の甘酒熱し金閣寺

土手をゆく貨車の長さを見てる春

名古屋市 菱 田 満秋

春がくるからとテレビも妻も云う

春の陽の下で芽生えた旅ごころ

岡山県 池 上 知恵美

急救車聞いているだけの大都会

大阪市 橘 高 薫風子

黒髪を梳くバイオリン弾くように

妻の死以後囊の中を傘ささず

ビリの顔もトップの顔も苦しそう

角屋青員の間

忍従の女ごころに光る貝

下関市 中村 九呂平

裏長屋がみがみ云って皆平和

五分刈にして御破算の意気を見せ

奈良市 宮 口 笛生

子供二度目の入院

病院の暮しに馴れた不倖せ

付添えに妻をとられた日の不便

一人子と云う心配の手術室

大阪市 西 川 晃

天地春病人長い欠伸する

本棚で変色してる四書五経

進歩とは何ぞと万葉読みながら

値切りたおして釈迦一代記を買えり

神戸市 仲 どんたく

宝くじのつもり東大受けてみる

ホステスのあにはからんや子が二人

出張と思えず車窓雪見酒

手形割る話ゴルフバッグ同士

平田市 久 家代 仕男

入院へ付き添う荷物夜逃げめき

雪とけて広告灯も春の息

上を向いて叱ろう伴のびざかり

猫までが斜視とは母の気がつまり

大阪市 本 多 柳志

つばみから散るまで貰めてバスガール

つきあいの悪いあいつの家が建ち

日曜大工ハンマを取れの持つとれの

火事 花輪 祝電 櫛 立候補

葉ざくらの下で飲んでるバス会社

西宮市 樋 口 舟遊

核は悪魔死卵をかめ抱きつづけ

新潟県 高野 むじな

不合格なくさめる言葉用意する

尻押しまで出して定員違反する

学歴を新学制に云いなおし

大阪市 石 倉 旅風

僕とこを酒屋できて来た気転

ハンドバッグ持っていないのが目立ち

貧乏に遠慮の要らぬ西成区

解けそうで解けぬスラムの雪だるま

大阪市 魚 住 満潮

続西成界わい

欠食児童バン屋にバンの並んでる

手拭が一本切りの私物なり

猫ババの金パチンコで皆とられ

飲代が出来たか易者もう帰える



愛媛県 村上旭童
女ある日子をつれて来てまごつかせ

愛媛県 榎 紫光

紙すきの労苦を覆うて金襖

岡山県 横山 一声

又やりこめられてねるも父
かくて果てじと一円の事にふれ

神戸市 傍島 静馬

アイディアをくさしておいて利用する

女房をにらんで嫁に小言いう

雨の日は敬遠しとく神詣り

外人も素早く席取るこつ覚え

笠岡市 木山 遠二

ほけて来た頭へベレーびったりし

宝石屋安物までがピカピカし

草野球にも光るのが一人居り

当選の饒舌が一つふえ

布施市 森下 愛論

札束へホステス亭主忘れかけ

酒癖はどうであろうとカモにする

大阪市 河井 庸佑

合格欄三べん見たが見当らず

新時代無理に読ませる字に弱り

大阪府 谷 沢 好祐

参観へセットして来いと女の児

もめている討議の外につんば居る

堺市 高津 徹也

あの青年とあの娘と仲人好き思ひ

道すがら摘んだ野菊で慰問する

音楽をやらせばバリへ行きたがり

不渡りの手形反古よりなお困り

酒入れて子には持たせぬ魔法瓶

キャバレーの妓の溜息にまたかかり

青森市 工藤 甲吉

PTA マダムは生地顔でいる

受付が追い返せない美しさ

松江市 小林 孤呂二

好きな娘はゴメンネゴメンネそれですみ

保守革新たよりにならぬまま生きる

犬が死んでますと電話料金まで払い

春や春韓国警備艇に捕獲される

松江市 舟木 与根一

さらさらと流れぬ裏日本の川

花見酒の出どころまでも気をつかい

新築中

よいいとまけ春も案外高い空

首締めてから合掌をして逃げる

大阪市 今西 生薑

松川事件

神のみが知ると判決出来もせず

京都市 室井 八九寸

新聞に咲いてた梅は見当らず

紙すきの労苦を覆うて金襖

岡山県 横山 一声

切れ味も知らぬ名刀大事がり
働く者の味方が甘い汁を吸い

小松市 関戸 宗太郎

中卒が一番先に家を建て

投票を頼めば入試を頼まれる

入院へトランジスタを貸してやり

特売場で踏まれた足がまだ痛み

石川県 高山 涼髪

赤旗のもとに白髪もしわもふえ

厚星の愛した川もゴミだらけ

妻の一票ただにこにこと笑うだけ

美禰市 安平 次弘道

産制のききめ分校廃止され

予備校のミス合格者へも案内書

選挙月両派の酒で酔う花見

宇部市 平田 実男

ソファの深さ火の車とは見せず

口が動かねば寝ている里帰り

パトカーへボスはちよいちよい便乗し

大和郡山市 中内 孚彦

きょうからは天下の浪人そこをどけ

スベルことより世評だよ怖いの

貝塚市 杉本 一鶴



道ならぬ恋を作家はあきもせて
やせぎすの力を女患借りに来る
骨のない胸へ厳寒刺すことし
寝化粧のみだれ雪とけ見ることく

富田林市 浅川 八郎

老ぬれば輦棧敷で識る平和

耐えること強いる貧しき父親の

岸和田市 内藤 さき子

万のつく羽織を邪魔のように脱ぎ

家政婦の気まま再婚嫌やと云う

名利へ絵になる嵩に雪が降り

青森県 木村 涼入

喰ってけるだけでは若き氣にくわず

屋根雪の溶けるリズムも北のもの

地下足袋の爪は闘う貌にする

何カウントとは春雨も品が落ち

そう偉くならなくていい夢に生き

大阪市 唐崎 専翁

酒樽が恋しいという若きなり

倉吉市 奥 谷 弘朗

宴会の遅刻スリッパに有りつけず

病む妻へどうにか出来た目玉焼

娘が巣立ち淋しさ時雨と共に来る

兵庫県 遠山 可住

無神論も富士の日の出へ手をあわせ

スカーフを巻くにも今日の型があり

兵庫県 河原みのる

仰げば尊し師を摸る相談

孫娘肥えるこえると云いだした

地球一転振り落されもせず朝

姫路市 隠岐 不酔

新婚へ暖かして今日は

大阪市 田中 敏行

帰阪一周年

同窓会恩師は案外若かった

家計簿をつける妻にも白髪あり

同舟近詠

大阪市 橋本 緑雨

持ち寄って飲もうやないかと停年組

須崎市 高峰 柳児

人づくり儲けることと抱き合せ

ベレー帽趣味の広さで今日も出る

金づるの縁談親からきまりかけ

参観日わが子一向手をあげず

筋通す話し口下手くだいたげ

二日酔昨夜の釣銭が腑に落ちず

主婦の座の間口広がるPTA

和歌山市 秋月 宏方

被写体が悪いと鏡思えども

大州市 米沢 曉明

個人ならこれではすまぬ悔料

元教授とかが養老院で逝き

一生を施設の母として終り

終焉の場所のしるしが石一つ

今治市 長野 文庫

間違つて不可ぬとスリーブに手をつけず

信用は社宅に住んでいる間

恵まれた生活ながら籠の鳥

時代だと云われ自説をひっこめる

今治市 月原 宵明

ドテラ着て電話かけてるとは知らず

坐り込みテント獣の匂いして

三月某日浪人とお別れし

氣の向かぬ縁談テレビかけたまま

春の雨夫人の猫を叱る声

上田市 金子 吞風

掃除する時だけ見えた美容院

奥さんへ子持ちの芸妓味方する

貯める氣で稼ぐ芸妓に子が一人

名古屋市長谷川 鮮山

眼に角を立てて父の座守り抜き

内心の苦しさ云わず自家用車

横綱の負けた話題もティールーム



川 傍 柳 初 篇 研 究 (二)

川 端 柳 風 柘 植 金 治 丸 十 府
高 須 啞 三 味 清 博 美 岡 田 甫
前 田 喜 代 人 藤 井 和 雄

(1才)

子正月五日開 川 柳 評

1 惣花に生きとしける物が出る

眠 狐

川端II「惣花」で吉原の句。「惣花」とは、遊客がその妓楼全部の遊女、遣手等に祝儀を出すことから、句意にその祝儀を貰いに、一家中の者が出て来たということ。

高須II「生きとし生ける物」で、生きてゐるものは全部と、大袈裟に言ったところが、開巻第一句を飾った所以であらうか。

前田II「惣花」の意が判れば、句意は明瞭。「生きとし生ける物」は、現代風に言つて、「猫も杓子も」といったところ。何のうがちもないが、文句取りの言葉にひかれる。

柘植II「生きとし生ける物」は、「古今和歌集」序の文句取りと思う。「——いずれか歌をよまざりける」(古語辞典)

清 賀。

藤井II人間万事欲の世の中、ずばりと言つたところ痛快でよし。

丸II諸説に尽く。「惣花」は「馴染金」といって、三会目に来た遊客が、あいかたの遊女に、定めの祝儀を出す。遊女はこれを、その客の使う茶屋、茶屋の下男および自家の下男などに分配してやる。それを言う。詳しくは「守貞漫稿」類句は西原柳雨翁の「川柳吉原志」参照。床柱を背にどっかと座した客が、生きとし生けるものに、おうようにうなずくお大尽ぶった様子がホウツツする。

岡田II三会目に出す「馴染金」と「惣花」とは違ふ。三会目の「馴染金」は、相方の遊女へ(その階級によって一両とか二両とかやり、遣手には一分やるのがきまりだが、「惣花」の方は妓楼の遊女と雇人全員にやるもの。(後出句の「三会目」で詳述ある・啞)

2 大坂といふたい所にきらず桶

川端II不明、御教示乞ふ。

盛 久

高須II大坂人が粗食で金を貯めた、ことを言おうとしたのか?

前田・柘植II不明。

清II吉原の句とは思ふが。

藤井II代表的古川柳、判るようで判らず、難解の一語につきる。

丸II「きらず桶」は、先刻御承知の豆腐屋の店頭などに出しておく「卯の花」を入れる桶。句意は、大坂といいたいような所に、きらず桶が出てある(即ち豆腐屋がある)ということ。では、その豆腐屋はどこかというところ、吉原の京町一丁目と江戸町一丁目の間にあった名物の豆腐屋「山屋」を言ったもの、吉原には、江戸と京だけあって、当時の三都としての大坂がないから、「大坂(町)」といいたい所と言つたものである。新吉原にも、江戸、京、伏見、堀町などあったが、大坂はなかった。

よし原へ大坂ばかり他人にし

(タル二16)

山城と武蔵の間に豆腐みせ

(傍二18)

が、その手がかりとなろう。なお、山屋豆腐については「川柳吉原志」に類句があり、また西原柳雨翁の「川柳江戸名物」にも記述されている。但し、両書とも本句を逸している。

岡田II丸説につきる。

高須II御明解に感謝。

3 万歳を唄お、廿つなく

柘 水

川端II「万歳」は千秋万歳の略で、年の初めに、風折烏帽子を冠り、大紋の素袍を着て、各家を訪れ、鼓を打ちながら、その家の繁栄を予祝する歌舞をして歩く者で、関東は三河国から出たので、「三河万歳」と言った。(「川柳大辞典」)

三河辺りから江戻に嫁に来て、家庭の愚

痴を、同様の万歳に話しているものか、或いは初めての正月で、実家に帰ってみたいくて、切ながっているものか、よく判らない。

高須 嫁の家舞は、この句では問題外で、まだ娘気の失せぬ嫁が、万歳の当意即妙のはやし言葉や、やや卑猥の物腰に、抱腹絶倒している所である。「おおせつなく」は、笑わせられて「切ない」と言っているのである。

前田・高須 評に尽きている。ただ「切ない」は「苦しい」意で、笑いこけて苦しんでいるのである。

柘植 「切ない」は、万歳のはやし言葉に笑いこけて苦しいのではなくて、「まあいやねえ」と、少し困っている様子だと思う。

清 高須説で十分と思う。

藤井 右評と同じ。ただ時間的に少し経過があって、次の部屋へ逃げ込んだ嫁（この場合、ただうつむいて、赤らめた顔を、袖で半ばかくして）が、おかしさといやらしさのカクテルに切ながっている様子を「おお切な／＼」が、よく示していると思う。この点、高須説と柘植説とミックスして頂く。

丸 諸説につける。万歳については「守貞漫稿」「絵本風俗往来」「川柳江戸年中行事」その詞については「花月随筆」類句は「川柳江戸年中行事」参照。なお、本集にも

万歳の一問こなたで嫁ころげ

(傍四八)

がある。

岡田 二むかしの万歳は「おかみさんが好きななら、旦那さんも好き」などというパレことはを言った。これは、子孫繁栄、一家繁昌を、正月だから祝ったもの。そのとき才蔵がツイストぼりの腰つきで、鼓を叩いて舞うため、女達は顔を赤らめて逃げ出したもので、それを詠んだ句も沢山ある。

4 恥しい涼小へりへ水がつき

秋紅

川端 二不明。

高須 二河べりか水辺で、涼をとっている婦人（この場合、娘と断定しがたい）の、内股深く水がついた、ということと思うが、情景に判らぬものがある。

前田 二この「涼」は、一般的な夕涼みととりた。すなわち、夕涼みをしていると、打水の水しずくが裾にかかったので、恥ずかしいと言った程度で、内股深くとまで考える必要はなからう。

清 二不解。

藤井 二どうも「小へり」が小股論になりそうだが、よく判らない。

丸 二「小へり」は船ばた。

やかた船小へりですと寒く成

(タル七三)

夕涼みにせつかく船を大川に出したものの、大勢乗りこんでいるので、いまにも船ばたが水が浸かりそう。スダレを川風になぶらせ、美形を傍にはべらせた、豪勢な涼みにくらべて、これは同じ船の涼みでも、小恥ずかしい涼みではある、といった

句。其角の句に

この人数船なればこそ涼みなれ
というのがある、川柳子秋紅は、それを「恥ずかしい」と感じている。自然に傾倒した俳人と、人間俗世界に執した川柳人との感じ方を、ここに見る。恥ずかしい涼みでなく、よい涼みの句が、本編にある。

い、涼み四五人屋根でかけつくら
(49オ)

い、すゞみあたまの上をあるかせ
(49ウ)

岡田 二十府解につける。

高須 二御明解に敬服。古川柳を解くためには、何をいっても多読が必要と判って、赤面。

5 羽子のこをかさぬ子を嫁た、くまね

一甫

川端 二新婚早々で、まだ娘っ気が抜けず、羽根つきをして遊びたい嫁の様子。ひやかされて叩く真似をする恥じらいと感しさを詠んだ句と思う。

高須 二「羽子のこ」は「羽根をつく羽根」を言ったもの、それを嫁が貸せと言っても「貸さぬ子」を、嫁が怒った真似をして、叩く形をした、というだけの写生句であらう。

前田 二平凡。「たたくまね」と名詞止めにしたところをとる。

清 二高須説に賛。

藤井 二それだけの句。「羽根のこ」と「貸さぬ子」と、文字の遊びに過ぎぬ。

丸 二「羽子のこ」は、高須説の如くであ

るがやはり本編に

わざとぶたれに羽子のこの邪魔をする
(3ウ)

の句あり、この場合は「羽根つき」そのものとも解される。

岡田 二まだ娘気分の抜けきらない、若々しい嫁の姿が、よく描かれていると思う。当時「羽子の子」は普通言った言葉で、別に下の「貸さぬ子」にかけた狂句仕立てではない。

6 人相のよしあしを知る法

(葉十)

川端 二老分は、一両の四分の一で、吉原では揚代一分の遊女を、こう呼んでいた。所が「人相のよしあしを知る法」だから、客を観察する遣手の態度を詠んだもので、

吉原における三会目の遣手への祝儀が一分であり、「一分の金があれば程に可笑しいか」「鼻を拭くのに遣手笑いかけ」の類句がある。また紙花として呉れる小菊一枚が一分で

花紙で招くと遣手直ぐに来る

(拾八五)

もある

高須 二一分で「人相のよしあしを知る法」とは、何であらうか。

前田 二ただの「一分」や「素一分」の句は沢山あるが「法一分」の句は珍しい。そして、それが「人相のよしあしを知る」を生かしている。類句としては、川端氏のものよりも

人相をいろ／＼にする婆ア也

(玉柳 17)

の方が面白く適切であらう。

柘植「法、一分」と切つて読めば解り易い。いつも淡い顔をしている遺手の顔をは

ころばせるには、一分出せばよい。それでも駄目なのは、余程のヒネクレ婆であらうと、客の方から観察している句であらう。

清素一分とアタ名される、懐具合のよくない遊客を詠んだ句と思う。四ツ手にも乗れない。そんな連中を、軽んじた句と解したい。

藤井「同じ一分の金でも、その出しっ振りで、その懐具合と人柄が判らう」というもの。法と一分とを分ける柘植説に賛。遺手に限らず、お客の人相も判るわけ。

丸「法、一分」ではなく「法一分」でよからう。しきたり、きまりとなっている一分、(三会目の遺手へ祝儀)を出せば、たちまち相好をくずし、出さねば鬼面。人相のよしあしを、たちどころに知ることが出来る。

婆アの長咄し老分くれろ也

(傍一 34)

のどぶへをねらいそふなへ老分遣り

(傍一 10)

金時を産ミそふなのへ老分やり

(傍一 14)

なお類句は「川柳吉原志」遺手の項参照。

岡田「小生は「法、一分」説。礎稿にもあるように、一両の四分の一の一分は、當時ではなかなかの大金。米価に換算すると四、五千円だが一万円ぐらいの価値はある。五千円にしても、普通のところでは、めったにチップなどには使わない。いまま

喫茶店の先駆ともいうべき水茶屋などでは、百文おく客はお大尽で、看板娘めあての見栄だった。(一分は千文にあたる)

吉原はなんでも一分するところ

(傍四 18)

で、一分のチップ、一分の料理、これが吉原の豪遊たる所以だった。古川柳で「一分」とある場合は、まず吉原を想起しなければいけない。特に三会目の登楼でナジミになる場合は、遺手に一分のチップをやるのが、きまりであった。

7 喰つミへちよいといつて猪牙

へ乗

眠 狐

川端「喰つみ」で新年の句。「食積」とは今の重詰の類で、新年の祝いに、三方の上に米を盛り、種々の取肴を飾り、時にこれに松など立てた。それで、この句は、新年の祝席に顔を出したが、いつの間にか猪牙舟(一名山谷舟)に乗って、山谷堀へ遊びに行ってしまった、という句であらう。

高須「原解賛。ただ「猪牙へ乗り」は、

この時代としては「吉原へ行く」ことなので、祝膳へちよいと座って、直ぐ北行した、という句であるが、「ちよいといつて」なる言葉を、誰か説明して頂きたい。

前田「いつけ」は「居着け」で、落ちついての意と、「斉け」のかしずくの意とがあるが、ここでは前者であらう。

柘植「賛成。まだ何か食べながら、そのまま猪牙舟に乗る、という情景と思うので、この句は船宿の句と思われるが……」

藤井「いつけ」は、前田説ではどうもビタリと来ぬ。祝膳には真似事に座った

が、心は北へ……という句には違いないのだが……。

丸「いつける」には、①結いつける、のつけるの意と

帳へ首いつけたやうに伴頭みへ

(傍三 12)

去状へ文をいつけて亭主出し

(傍二 8)

はな紙へじゆずをいつけて大小言

ト

②言いつける、告げ口をする

(タル五 15)

米をかむ事をおりやうへいつける

(タル八 38)

の二様の意味あり、私の郷里(仙台)では現在でも通用している。本句の場合は①の意で、句意は正月早々の吉原行きに、なじみの船宿へ寄り「まアまア」と引きとめられるのを、軽くいなし、食いつみに祝儀(年玉)の紙包みをちよいと載せて、用意の猪牙へヒラリと乗るというので、いかにも遊びなれた、いきな人物の姿がホウフツとする。猪牙については、先刻御承知の通り。詳しくは「守貞漫稿」参照。類句は「川柳吉原志」参照。

岡田「いつく」「いつける」「いつかる」については、拙著「末摘花評釈」に文献をあげて「載せる」意であることを解いているから、同書を見られたい。

高須「丸、岡田両先生に感謝。同書は一度読んでいたのだが、一読くらいでは知識にはならぬものらし、慚愧。」

8 抱た子をなげそふにしてよしに

(米子)

川端「子守が叱られた腹いせに、抱いている子を「お前が泣くから叱られるのだよ」と、投げ出しそうにしたが、赤ん坊のことだからと、思い直したという句。一寸見て、赤ん坊をあやしている情景かと思つたが、「よしにする」で多少真剣味を感じて、上述の如く解いてみた。

高須「抱いた子を投げそう」にすることとは、今でも大人のよくやることで、「そら渡すぞ」と投げる様子はするが、本当に投げはしない。この句の場合、別に子守と限定する必要もないし、叱られた腹いせとまで考えることもない。軽い写生句で、佳句と思う。

前田「高須説に賛。「よしにする」は、

真剣といった感じでなく、反対に軽い気持ちの情景であり、川柳常套の表現で、快いひびきをもっている。

清「軽い写生句であらう。「子をほうるまねをして行く橋の上」の「ほうるまね」と同じである。

藤井「小生に慎坊という初孫あり、「慎坊、それ投げるぞ」とおどすと、坊主キヤッキヤと喜んで、抱きついて来る。この句、子守りでなく、父母、祖父母、或いは親しい人の子をあやす、微笑ましいシーンで、それを第三者が見て、詠んだ句と思う。

丸「諸説に尽く。西原柳雨翁も「小児を喜ばすための仕業」と見ている。

岡田「小生は藤井説と解していた。子供をあやしている実景、と見るべきであらう。

伝説創作委員会

東野 大 八

いきつめのグリルで、宿酔をさますべくカチツリ入りのブレンドを飲んでいた。空いている前のイスへもそりと一人の男が坐つた。

別にたて込んでいようというほどでもないが、ホールのそここのテーブルは一面ふさがつていて折柄とて、別段気にもとめず、木くさい三角ガラスの底につこんだ箸ヲをやぶつていた。

ところが根っから相手が動かない気配に、何気なく顔をあげると「相変らず飲み過ぎですか」となれなれしく相手がいう。ハア、と反射的にこちらは答えたものの、その相手の正体がわからないう。まず細く刈り込んだチョビひげ、それをくつつけている丸い大きな顔に、アメ色の太い眼鏡。

「ははん、わかった大川博東映社長だ」と思ったが、ばかヤロウ、そんなエライさまがこんなチャチなグリルへ現れたりなぞするもんか、と別口の自分に叱りつけられてあわてて、正面切って相手を眺め直した、すると

「お忘れですか、東濃のジンベで……」
 といってチョビひげの両側がひろがった。人なつこそうな快心の微笑。

「ああ、ジンベさん！」
 こちらはオウム返しにそういつて、思わず手の内のグラスを横倒しにするところだった。

「ホント、お久しぶりです」
 そういつて相手はまたひとしきり微笑をくりかえして、丸つちよい指を一本上に向けて

「お指、ビールだ」
 と給仕君に言いつけた。

「宿酔はこれに限る、そんなものなんの足しにもなりやしません、かえって胃に悪い」
 そう言つて、相手は本当にお久しぶり、十五年ぶりぐらいでしようかね、と丸い顔をゆつくり右に傾け、左にまけてトロンとしたこちらの顔を飽かず眺めている。

「そう、十五年になる。このジンベさんと四国で別れてから……」
 そのころ彼は四国のある町の警察署長さんだった。こちらはその新聞社の支局長。会った瞬間から妙に気があって、よく二人で官舎や、うちの支局で青びん一本を湯呑につぎ合つて飲んだものだ。もういい歳だから退官して、しかるべき会社にもでもぐり込んで、好きな棋譜でも部屋の前隅に積みあげていこうとだろ。

ビールがきて、一しきりその後ろの話が出たあと、実たねえ、とジンベさんが真顔に言った。
 「デンセツを一つ作つてくれませんか、デンセツ……」

「宣伝のデンに小説のセツ、すな

わち伝説」
 「ああ、伝説ね」
 「真木曾のSという町ですがね、最近冷泉ながら温泉が出ました。町当局では大喜びで、ここを一つ開発して将来一大温泉郷にして全国にも宣伝しようというわけですが、ところが戸数千七百、人間も三千そこそこのつまらん町なもんではない、観光温泉にしようにもろへは誰も来やせん、そこで、人をあつめてだてをいろいろ思案したり、あるのは杉の木山とお墓ばかりでなんにもない、結局昔語りの話の一つぐらいいはないかと捜したが、木材人足の足だまりにすぎない宿場あがりですんなりのきいたものは一つもない、結局、伝説をデッチ上げて……」
 「でつちあげ、ですか、とするとインチキですナ、これやあ。伝説あるが如く狂い、通行人より多額の金を盗しと……と、いうわけでは刑法第四条でしたかね」

「とたんに好人物の元署長の顔がしわんだ。
 「イヤ、怒らんで下さい、それは冗談です。ナルホド、ナルホド、それはいい分別ですな」
 と気の毒になつて、こちらはいきなり話題を転じ一筆にオツにくだけた調子を出した。ジンベさんはハンケチを出して、もう赤くなつた顔の一部をこすり出して
 「わたしも官服を脱いですでに十年、おみかけ通り巷の善良な国民の一人ですけん
 と、とんと方向ちがいの註釈を試みた。相変らずの人情署長のお人柄だワイ、とこちら一むかし前の感慨を呼び起した。

まあ、こんな具合で、僕は名もなき町の伝説創製にとりかかる破目となつた。
 ジンベさんが、なぜ僕ごときものに「伝説依頼の件」を持ち出したかという、これにはワケがある。
 満洲東滿に鏡泊湖というでつかい湖がある。中禪寺湖の約三倍半とかきいたが、ここを満洲調査班の一行と、新聞記者の二団とが行を共にし、実地踏査に出かけたことがある。またより随分遠い昔のこと、二十五、六年も昔のことになろうか。
 世話役は牡丹江鉄路局で、その鉄路局長は大里基三郎という人だった。僕とは因縁深い人で大陸生活の最後の日まで、いろいろとお世話になった満鉄から華北交通を通じての最高首脳であつた。
 この大里局長が、記者団だけの席で、こういうことを言い出した。
 「鏡泊湖は、満洲国切つての秘境でありますので、国内はもちろん日本から全世界に向つてこれを紹介し、東洋切つての有力観光地としたい。ところが、実物は結構すぎるのだが、伝説がない。観光地には夢とロマンスが必要でありますので、ぜひとも才能豊かな皆さんによつて伝説を作つて頂きたい。いいものは即時採用し、十二分なるお礼をさしあげたい」
 まあ、そういうような話で、われわれは直ちに現地に向つたものである。

五珠川純平の「人間の条件」にこの湖が登場し、哀れな姉弟の死の一部が語られているが、とにかく「鏡泊湖伝説創作委員会」なるものが、実地踏査後の慰労会の席上、誕生したことはたしかだ。
 「金色夜叉」や「巴ヶ罪」を満洲映画協会で製作して、満洲現地に人に見せているような当時の満洲国だったので、ジンギスカンは義経だ、ということも通用したし、王妃のお母が則天武后の生れかわりといつても不思議ではなかつた。だから、鏡泊湖滞りのわれわれは大名旅行をさせて頂いたお礼に、てんでいい気なものを作つたらしいが、まともに文章にして出したのは僕一人だった。
 鏡泊湖の本命は日本海で、ナイガラを思ふような雄大な激流だつたので、この湖の沿うに電宮がある。その電宮の使いは早急とした。僕は向うでは「巴八」(ツンバ)とクナされていて、現合が怒つたかである。どんなストーリーにしたかまでは正確に覚えてしまつたが、とにかく採用、不採用はとにかく大里さんから金一圓を俵はもつた。百圓入つては当時の金だから酒と女が一晩たつて買えるほどの金だった。
 僕の宿酔の顔の前に現れたジンベ元署長は、むかし、僕との酒席でこの一件のことを小耳にはさんでいたものらしい。とにかくそんなことから、伝説創製を依頼されたわけである。
 だが今日まで電話や手紙ですでに十回近くも催促があるが、僕は今だにふんざりがつかないでいる。僕と仲のいいある坊さんは「淫祠邪教が伝説では一番金になる」と衆屋裏をぶちまけて示唆に富む話のかすかすを披露したが、宿酔で頼まれ、そんな頭ででつちあげた伝説が万一この世でまかり通るようになれば果して首尾はどうなるか。若さが道理を誤りこめてくれる植民地的一件とは異なり、こちららはや老齢、いし加減な話で山縣の人々を惑わす罪深かさは遠慮せねばなるまいと考えている。

ほめた句

ほめられた

句を語る



土

田中鳥雀

句会で平賀紅寿さんから
「ある初心者か」

洗濯は染し洗えば白くなる
という句を示して、これでも川柳
ですかと、言われた」という話を
聞いた。

洗えば白くなる、という落ちが
軽く明るい。以来忘れられないの
で、後日作者名を尋ねたが、遂に
わからなかった。

川雑の京都句会は、時々雑談に
花が咲いて、誠に楽しい雰囲気
を醸す。

それを愛してこられる方も多
い。何んの話からだったか、堀豊
次さんが

「こんなんしってはりますか」
とんぼつり弟ねずみとりを

さげ
このいじらしい子供の風景が眼に
焼きついた。これも作者不明であ
る。

お寺を巡って、落款のない素晴
らしい襖画を拝見して、筆者不明
なのを、何だか物足りなく思うが。
総じて時代が下るに従い、自分
の名を出したがるいやらしさを思
うと、かえって不明のままがゆか
しい。

もう二た昔も前だったか、川雑
に武玉川の十四字句が取上げられ
ていた。

冬の牡丹の魂いで咲く

大変な共感を抱いて、武玉川の十
四字句を、全部抜書、選り上げ
て、珠玉篇三巻を作った楽しんで
いるが、あまり熱を上げて、或る
例会日を十四字句会として見た
が、勝手の違う人達で、不成功に
終わったのは残念だったが、ぼつぼ
つ十四字を試みる人も出て来た。
武玉川から一寸拾って見ても

忘れに出たに能く似たる顔
今がよいとは言わぬ後添
うつくし過ぎて入れにくい傘
やめがらすに張のない風
取付安い顔へ相談

何かにつけて男兄弟

総身を耳とおもうあて言

夫の惚れた顔を見に行く

真面目に成るが人の衰へ

そう笑ってははる反り橋

ざつという調子ですが。

さて腰弁というものは、自分の

すかぬ奴とでも、同じ屋根の下に

働かねばならぬ。小人共と暮して

いることは耐えられない。

足利二代將軍義詮は、臨終に一

子義満には、「頼之を父と謹んで

教えを守れ」と諭し、頼之には、

「子供を君の子と思つて輔育して

呉れ」と頼んだと言われる細川頼

之は、尊氏以来三代に仕えたが、

三代義満が、長ずるにしたがい、
漸く側近の佞奸に惑わされ、頼之

を練するに及んで、小人の退け
難く、大功の立たないのを遺憾と
して、刺髪。

人生五十功無きを愧ず

花木春過ぎて夏己になかば

なり

満室の蒼蠅掃へども去り難

し

起つて禅榻を尋ねて清風に

臥せん

と下野した。その気持に共鳴して

小人ばらの暖屋に腹が立つと、こ

詩を吟ずさんで、鬱を晴らしてい

るが、路郎先生著の「累卵の遊

び」に、柴谷柴舟先生の軽快な画

を添えて

蠅だけの部屋に楽しげなる

蠅よ

を見付けて、以来蠅は蠅として見

る度量が開けた。

川柳を処世訓として見るのは、

邪道である。然し名吟は人の心を

打ち、心感ずれば、大なり小なり

影響がある。

凡人となれ一つ捨て二つ捨

て

もとり処世訓ではない、むしろ

教訓の臭味がない処に川柳たる所

がある。

樽曳や葡萄色なる闇もよし

教育上どうのこうのと、川柳はそ

んなことに煩らわされることはな

い。

窮屈な部屋に恩人老い給う

とも
凡平

大阪は轢れかけても好い所

かほる

であろうし

言うまでもなく唇のかわく

恋 雅楽王

をして

嬉しきの三丁程も続きけり

馬行

だ。やがて己が足元を見よ

土掘れば土土掘れば土と土

日車

だ。

これやこの瑞穂の土の一握

り

それが 半文銭

還るべき土か去るべき土か

とも 同

となり、一巻の終。人生六十六、

後世に遺る一句なきを愧ず。

ほめたい句

ほめられた句

正本 水客

もう何年になるのか、小雨の心
斎橋筋でバツタリ豆秋さんに会っ
たことがある。『我橋』の題が出
てますので、ちよつと、あの
独特の頭をさりげなく撫でながら
言われた。私はビシヤリとお面を
一本とられた気がした。普通なら

前の記憶を思い出して、経験とフィクションで句を作ってしまう処だが、豆秋さんはそうでない。自分の足で眼で「えびすばし」をみて来なければ、おさまらない人である。全く及びがたい境地にいた人だった。

どの句がどうとも言えない。作品の持つ人間が私をやわらかく圧倒するのである。

うまい句として昔から私の頭にこびりついて離れないのは、小松園さんの

泥棒の逃げた窓から首を出し

の淡彩と、西田卿楽さんの

長襦袢女は風邪をひかぬもの

の濃艶さである。

ある句会の席で、私はギョッとして選句の手をとめた、

星のない夜壁のように山

大きくて鋭い。頭の上から、のしかかってくるような句だ。披露の結果、阿万のさんの愛嬢ひろ子ちゃん（たしか、ひろ子ちゃんだった、小学校なん年ぐらいたったか、句報を探してみたが見当らなかった）の句だと分って私は、すっかり嬉しくなったものである。

さて人からはめられた私の句となると難物である。（陰の声―あ

んまり多すぎてかい、別の声―ソオツケ）

大鉄川柳二十五周年大会のとき、記念品の一つに

松茸が届いて何も言うてこず

の句をマツチにはって渡したことがあった。それから一年ほど経った或る句会の席で高砂のWさんが態々わたしの前へきて、きっちり坐った。

去年の大会の時に貰ったマツチ、何でこんな句書かれたんか思うてましたが、この頃あの句が分ってきました。よろしいなあ。そう言うWさんはニッコリとせず元の席へ帰って行った。

付添いも初耳という顔になり

片親の思案に余ることを言う

ぞっこんという言葉があるが、私の水客川柳に対する憧れが正にそれである。これは姫路のSさんの短評の一部であるが、都合の悪い処は省いてあることは知る人ぞ知るである。

鈍感

吉田圭井堂

人間というものは大変勝手な動物で歳をとればとる程感動とか感激とかが鈍くなり終いには何を見ても何を聞いても全く感じなくなるとではないかとさえ思います。

私も多分に洩れず

人様の句で「うまい」と真底からほめた句はと正面切って尋ねられると甚だ失礼ですが近頃そんな句にお目にかかれないうと申上げるの外ありません。それ程私の神経が鈍化してきています。

従って私の句で他人様からはめられた句なんてあろう筈もありません。第一私自身が惚れ惚れするような句を作った覚えがないのですから又当然と言わねばなりません。

それでは他人様の句で感心した句は一句も無いのかと言われると若い頃、そうです今から三十四、五年前、昭和の初期の十二月十四日「義士に因んだ句会」というのがあって私も出席、その日の席題に「売られ行く女」というのが出てその天の句に

売られ行く女へ駕屋あくびする

というのが誰方かの作であったのを覚えています。何んと立派な句だなと深い感銘をうけたものです。

違う立場をはっきり家の内では夫の用金調達の為、身を祇園の力に売られ行く、哀別の愁歎場に引換え表ではそのおかるを乗せる

駕かきがなだ豆きせるの煙草も喫み飽き、空き駕の屋根に両手で顎を支え、挙句の果ては大きな欠伸をしなが待つおかると駕屋の心理を、心憎い程びしゃりに感心したものです。然しこれとて私が若い頃盛んに歌舞伎を観る機会を与えられていて、初代鶴次郎の芝居を毎夜のように観ていたため、福助のおかるを想い出していた感動であって、一度も仮名手本を観ておらない人には何の感動もない筈です。

又もう一句それも昭和の初期に全国川柳大会が東京にあった際、臆面もなく私も一員として上京した時の兼題に

「気まま」というのが出ていました。それも誰方の句だったか忘れましたが天の句に

胎教の外の気ままは許される

が今でも私の頭の中にこびりついて離れません。全く深い感銘をうけた句です。いうまでもなく胎教とは人々によつて色々な簡条をあげる説もありますが先ず一般的には

- 1、ぬすみ
- 2、つまみ喰い
- 3、まおとこ

これだけは親の血を引くといつて最も妊婦として慎まねばならぬとされていた、従ってこれ以外の気ままなら大目に見てやる、少々朝寝坊しようがと言う夫の思い

やりを、びしゃり、よみ込んだ名句、流石三千句を越す作品の中から撰り出された句だけに語呂といい、句品といい内容といい立派なもので、今でも感心しています。然しこれとて丁度その時分私の妻が身ごもっていたので特に感動したのかも知れません。

近頃の句は川柳で毎号沢山読ませて貰っていますが前述の二句のような感動をうけないのは矢張り私が歳をとった故ではないかと思いますが、私の心の奥底で、「必ずしもそうとばかりも言い切れない」とつぶやいていることも事実です。

曇言多謝



ココロ
便箋



睡眠の話



中島生々庵

春日遅々仁王さんも眠くなり

これは清水白柳さんの句であります。奈良のお水とりがすむ頃になると、不思議に世の中はボカリボカリと暖かい日が続いて、四月の声を聞くともう老いも若きも春眠を覚えず、頭の中も春がすみというわけであります。

眠るという現象はどうして起るだろうか、なぜ眠くなるだろうか。日本人は米のめしを食べ過ぎるから、ねむたがったり、居眠りをしたりするのだと簡単にきめていている学者もあります。然しそんなに容易には生理学的にも病理学的にも心理学的にも割り切つて終うわけにはゆかないようであります。

三月から四月にかけて日本人が眠くなるのは、その大きな原因の一つに日本の氣候がそうさせるのだと言う学者もあります。事実

この春眠を覚えず云々の詩を作った人は有名な孟浩然であることは皆様もご存じの通りであります。この孟浩然の生れは中国の襄陽というところで、この地方は丁度日本の氣候によく似かよつていて、初夏は温暖過湿、米の生産も日本と同様、世界的の主産地であるそうです。恐らく孟浩然が北米

や、北ヨーロッパ辺に生れていたら、こんな詩は出来なかつたであろうと物の本に書いてあるのを読みました。

然しこのように米を食べすぎるから眠むがるという説も適当でないし、同時に氣候のせいばかりでも説明は難いので、睡眠はどうして起るかという問題に対して昔からいろいろと学説が立てられておりまして、私のような専門外の者にはなおさら判らないことばかりであります。時節柄眠りのお話

も一興かと存じまして、私の身辺にあるいろいろの本をもう一度復習して見ることに致しました。

面白い話があります。私は時々幼稚園のPTAからたのまれて講演に行きます。聴いて下さる方は全部といつていくらい婦人ばかりです。ご婦人の方が男性の方よりどういふものか居眠りが多い。その居眠りの多いご婦人方ばかりの幼稚園の講演で馬鹿に私の話が評判がいいのです。或る時或る幼稚園に行った時、帰りがけにその評判のいいわけを尋ねましたところ、お前の話は、話が始まると早速、話が終わるまで実に眠り心地がよくて、連日の寝不足や疲れが一ぺんに吹っこんでしもうて気分が爽快になる。それで評判がいいのだといわれて大笑した事があります。

に帰つて本夕は睡眠はどうして起るかというお話をしたいと思ひます。

デカンショ節ではありませんが、人生半分は眠つて過してしまふといわれておりますが、半分までもいかなくとも、すかまはたしかに眠つて過すように思われます。又睡眠を充分とらないと健康なり、生命を保つてゆけないのも事実であります。人間は何日程眠らずに生きて行かれるかの問題は、動物実験のように実験するわけには参りませんので、はっきりした事は言えないとして、大体五日間位だろうというのが学者の間の意見のようであります。兎

ので一カ月というところであります。動物実験ではいろいろの角度から研究されているのですが、面白いことには、眠りは邪魔せぬが食物を一切与えない仔犬の一群と、食物や水は与えるが絶えず刺戟を与えて眠らせないようにした仔犬の一群とに分けて観察する実験で、食物を与えられなかった一群は死亡する時は体重がおよそ半分位になつてゐるのに、眠りを与えられないで死亡した仔犬は体重が大して減少しない。これに反して

脳の重さが不眠の仔犬では著しく減少してゐて、絶食の仔犬では大して変化がないということですから。そして重大なことは不眠のために一程度以上弱つてくると、そこで睡眠をとらして最早生命のとりとめが出来ないということですから。

このように動物にとって大切な睡眠には四つの特性があるとされております。(宮城音弥氏)

(一)生活体に対する必要性——睡眠をとらぬと死をきたす。

(二)自発性——外的条件によつて直接ひきおこされず、内的欲求による。内外両条件による事は事実であるが内的欲求はある程度独立している。

(三)周期性
(四)外界との接触の減退——外界の刺激を感じにくくなり、外界へ働きかけることが殆どなくなる。ところで睡眠はどうして起るかという学説ですが、宮城音弥氏の「心理学辞典」や、杉靖三郎氏の「健康の科学」に就いてみますと、組織学説——細胞の連絡がはなれるとする説、循環説——脳の貧血又は充血と考える説、化学説——血液中の物質又は睡眠毒が生ずるとする説、生物学説——一種の本能とみなす説、等の学説と、間脳、中脳にまたがる限局さ

れた所に睡眠調節中枢があって、ここに大脳皮質からの影響が及ぶものと解することが出来るとしてあります。

又懸田克躬氏著の「眠りと夢」には以上のことを次のように稍々詳細に説明してあります。

(二)ニューロンの間の連絡が断たれるためによるという考え——ニューロン（神経元）というのは神経細胞とその突起からなる神経組織の単位体である。

(三)血液の循環の変化によるという考え——脳内を流れている血液の循環に変化が生じその血流量が減少するために脳の活動が不十分になる。

(四)刺激が遮断されるためによるという考え——明るいより暗い、板の間より布団、坐っているより横になる、騒々しいより静か

(五)睡眠をもよおさせるホルモンによるという説——この種のホルモンはまだ仮定にすぎない。

(六)条件反射学にいう内制止によ

るという考え——条件反射が消える。

(七)条件づけによるとする考え

——ゆったり横臥の姿勢、はげしい知覚刺激から遠ざかること、例えば幼児の背中をなでたり、ゆりかごを静かにゆすぶる、子守唄をくりかえす。快くなるような同一の刺激をくりかえすことによって形成される条件づけによって眠りが訪れるという考え

(八)脳の特定の部位と睡眠とを関係させようとする考え

というように列記してあります。

然しニューロンの問題は研究方法の不備であったことが認められ、脳内の血流の減少も実際に測定してみると、睡眠中に減少してないことが明かにされ、乳酸のような疲労素の増加という説に対しては、実験的に乳酸を注入しても睡眠は起らないこともあるし、逆に疲労してない時に、即ち疲労素が余り生じてない時にも睡眠が起るという事実からこの説もおかしい。夜寝る前に頭を使うこと、却って眠りをさまたげる原因になることもしばしばだし、朝に疲労素が減少している筈の時に深い眠りに入ることも説明出来にくい。刺激が遮断されるためという説は身体各部からくる報告のための神経の興奮が少なくなることが眠りの条件というのであるが、睡眠が周期性を持つという点でまだ充分説明されてない、即ち目ざめと眠りとの交代が固有のリズムを持っていることの説明が出来ない。幼児は何も聞えない静けさの中でよりも、やさしい母親の子守唄をきいている時の方がよく眠る。又同じように静かに刺激が遮断されているのに朝になってなぜ目がさめるのかという問題も起ってくる。

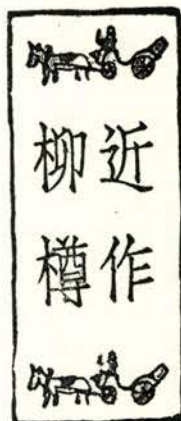
条件反射抑制説——即ち反復する単調な刺激は条件反射の抑制をおこし、大脳皮質の一部から全面的に拡げられて大脳全体の反射が抑制されて睡眠が起るという説——大変合理的であるが、睡眠は大脳皮質のないものでもおこり得る、又は生れだて嬰兒も睡眠を起すという事実に対して説明が困難になってくる。大脳皮質が睡眠に関係あるだろうというところは睡眠中に意識がなくなることから考えられるのであるが、最近の研究によると視床下部が問題であるとされています。即ちこの視床下部のところは障害されると長い

眠りがおこるし、動物実験で視床下部に電流を通じるとその間中に睡眠がおこるという実験から、このところに睡眠の中枢があるのではないかとの説が立てられたのですが、更にその後の研究で、この中枢を刺激したのでは睡眠はおこらないが、この中枢を破壊すると長期の睡眠が起る——即ち覚醒中枢があると称せられるのです。この説を立てたクレイトマンという人によると、体の末梢から大脳に向かっての刺激が減少することによって睡眠が起る。たとえば暗い静かな室に横に寝ると睡眠に入り易い、これは視覚とか聴覚とかからの刺激が最小になるし、その上大切なことは体を横にすると、通常緊張し活動している筋肉からたえず大脳の方へ刺激が向っている、その刺激が減少するといふことが重要なことだといわれています。



このクレイトマンの説からいうと睡眠していることの方が、目ざめていることよりもより自然的状態であるということです。下等動物は一日のうち睡眠している方が目ざめている状態より多いし、人間のよう一日のうちでかためて長く睡眠をとることはせず、短かい睡眠を何回でも分散させている。即ち飢、渴、尿意等といった緊急のほかは眠っているといううながが多い。

(本社四月旬会の講話から)



麻生路郎選
北川春巢選

税務署から帰りサツバリひげをそり
竹原市

杉原 愛場

その日暮しデノミやろうとやるまじ

同

僕の家建つほど現場の板がこい

同

時効ともならず女がまだ恨み

同

全盛に建てた家賃で母子生き

同

うば桜尼僧の乳房見ていたり

鳥取県

鈴木村諷子

花びらのどこでは入ったか市場籠

同

俺の膝目がけて孫がとびこんだ

同

余生の中のアたら一日無駄にして

同

卵酒飲んで寝てれる風邪をひき

同

アルバイトして見て親の有難味 新潟県

小林 孝正

特売場のムード家計簿ふと忘れ

同

親船の気やでと依頼おだてとき

同

背のチャック黙って向ける人が出来

同

乾布摩擦して新薬の名を知らず

同

住めそうにないので団地こき下ろし 秋田市

宮川 珠笑

妊娠をもう小姑が気づいてる

同

ご近所の期待にそむく仲の良さ

同

実印の愚痴は債務の役ばかり

同

栄達の読みが労組へ走らせる

同

表彰を受けて世間を狭く生き 新潟県

安藤 桂仙

チャンバラのロケ出来そうな分譲地

同

お転婆がしばらくにいる太鼓帯

同

腹たてて意見述べれば理事にされ

同

奉公人そんなあたまでまだ使い 倉敷市

水谷 谷水

新任の最年少所長猪の如し

同

七光り活殺自在の椅子にいる

同



柳志寸言

食塩少々

本多柳志

テレビ料理を見ていて思うのでありますが、初め色々の材料、例えば牛肉五十グラム、玉子三コといったように、列べて行きまして終りには必ず「食塩少々」というのがあります。食塩だけは何グラムと限定しないのが普通のようにありますが、この食塩少々という所に実は料理のきめてがかくされているように思われます。

さて川柳の場合であります、色々の素材をいくつか集めてそれらを適当に、取捨選択をしてその列べ方も考え最後に一句として、まとめて所謂川柳料理が出来上がる訳であります、この際食塩の役目をするのは一体何でありましようか。私はこの場合食塩の役目をするのは、諷刺であろうと考えています。

どんなに新鮮な材料をうまく料理しましても、諷刺という塩の利かせ工合が上手でないとコッテリ



欽む話逃げて力なく戻り	同	海の青女神の如し薩摩富士	同
何時までも見送る親にかえりみず	出雲市 中川 晃男	砂ん中何の苦もない首並び	同
ラッショ アワー生きる弁当しかと持ち	同	口紅の真赤な婦長で左遷され	羽曳野市 古川 静波
満員車棚の荷物を眼で押さえ	同	見舞の請求病院の花便り	同
足の線きれいで低い鼻を持ち	同	つり銭をたこ焼にする知恵がつき	同
仲直りさせるノロケが効き過ぎて	堺市 山本 素郎	七十で母を見送る淋しさよ	芦屋市 里田 一十
騎馬戦の如しラッシユの黄信号	同	せめて母の知ったお僧に式たのむ	同
税務署でオシメも替えてきた自慢	同	忌に籠り春の息吹きを敏感す	同
地味かしらなどと鼻毛をくすぐる	同	なにかもう一つ物たらぬ電気釜	伊丹市 小川 静観堂
烏口他人は家を楽に建て	京都市 小黑 王石	一泊の旅行へガイドブック二三冊	同
羽根ぶとん立志伝では板に寝て	同	ビール一本名前は故郷はなぞ聞き	同
裏話ブンヤに置いて発つ羽田	同	親の目にたよりないのが委員です	玉野市 小谷 仙山
聖職を子に見せられぬ程に酔い	兵庫県 常岡 孝風	明日の風信じて床のあたたかな	同
男三人寄れば金ない話する	同	事子供にかんして夫に負けられず	同
ナース来て背ナにたばこの煙を出し	同	警察の次に示談屋顔を出し	新居浜市 加藤 向水
南九州雑感		晴耕によりやく慣れた爪の土	同
バスしばし右も左もない溶岩	竹原市 山内 静水	よい女房外で飲まさぬ酒を買い	同

しすぎていたり、アッサリしすぎたりでどうにも戴けないのではな
いかと思います。

テレビ料理の食塩と同様、諷刺
の分量も何グラムと限定出来ない
のでありまして、食べて見て塩気
即諷刺が舌に直接感じられない
が、よく味って見ると成程うまい
塩かげんがビンと来るナ、といっ
た程度の諷刺が、匂の中から匂う
て来るといったようでない、コ
クのある川柳料理だとはいえない
のではないでしょうか。

不つづかな嫁でなかった塩
かげん

ある選者の 場合

岡山県 直原七面山

N氏がある川柳誌上で、＃お前

本

福寿司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



見習うて見習うて末っ子は育ち 尼崎市 大垣たもつ

湖に消えて城下へ店を出し

同

つかみ合いして疑いのとけた酒

同

市長さん新生喫うてはる人気 羽曳野市

小串正太郎

雪焼けを土産に友が見舞に来

同

この窓で漱石も見た山の宿

同

若い後妻へ退職年金たしかめる 仙台市

平野 光道

初午に素顔の女将お伴させ

同

ご破算でねがい途中でやりくりし

同

座り込みも陽なたほっこに見る春 高知市

須藤 俊江

四十の手習いシェーカー振る見せ

同

母だますように世間はごまかせず

同

早春の夜霧忘れたロマン燃ゆ 京都市

都倉 求女

結婚をしてから好き嫌いまで変り

同

貧しさは粗品進呈だけで去に

同

味噌汁へ難癖つける子を案じ 愛媛県

村上 石峰

教え子の便りそのままありがたし

同

選挙

来賓も本物が来る卒業式 西宮市

末沢 花美

咳込んで居る間にチャンス通りす

同

合格の子が近眼になっていた 羽曳野市

中川 利男

仲居して姉の子供を養ってる

同

安産の親で初産軽くみる 大阪市

宮尾あいき

ゆたかで無い方がお産も軽くすみ

同

風邪の子がテレビの薬のみたがる 今治市

八塚三五島

平凡に暮れるがおいしい旅の空

同

若い娘に押しのきかない老スキ 市島市

古谷まさる

ライバルのすべった後に亦転び

同

一円貨拾って立てばボリの居る 奈良県

木村よしを

寝込まれて飯も炊けない我を知る

同

これからが戦争ですよと終戦っ子 大阪市

銭谷かおり

三十の孤独小鳥に話しかけ

同

恩を仇で返す気でない不倖せ 玉島市

井上 旭峯

四面楚歌田舎は菜種の花盛り

同

の選はなっとらん。盲選も甚だし
い。あんな選をされたのでは、折
角楽しかった大会もつまらない大
会になってしまふ。もっと責任あ
る選をしろ」と抗議されたのに対
し、氏は、「後日印刷物となって
公表されることが判っているの
絶対出鱈目な選はしていない。精
一バいの選をしたことは認めて貰
いたい。がしかし、没句を見ずし
て選の批判をするなどとはおこが
ましい限りだ。」という意を洩ら
して抗弁されていられるが、私は
氏の最後の言葉が気になるのであ
る。

なる程批評者は氏のいわれるよ
うに、氏が選句された作品をの
み、氏の口から聞き、発表誌をと
おして見ているので、氏が没句に
された作品までは見ききしていな
い。
がしかし、その没句を知ること
と、選者の選が拙いことと一体な
にかかわりがあるというのであ
ろう。

恐らく氏は、「こんなに拙い句
ばかりなので、あれで選は最上級
なんだよ」といいたいのだろう
が、それは全くピン外れだと思
う。

例え情実によってその人が選者
に選ばれたにせよ、本当に拙らな
い句や、川柳に全然なっていない



肩をもみあつて按摩に ある レジャヤー 宮崎市	野口卯之助	帰省して徳用マッチなつかしい	同
我家の歴史つけもの石があり	同	寝煙草の癖も女に濁る過去 京都府	大久保 和三部
東京に続く道路で事故が増え 徳島市	吉田 俊和	トラックにマネキン あられも 積まれ	同
かわりのないことが好き処生訓	同	凧に前行く人も葱の籠 福島県	住吉 貞坊
葬式を出すには勿体ない天気 鳥取市	近藤 昭夫	卒業式親馬鹿どうし子馬鹿ほめ	同
落選とわかつていても義理の票	同	近所の目意識して買う訪問着 新潟県	岡本紀太呂
春雨にぬれつつ金を借りてくる パルアルト	斎藤 流路	宿賃を値切れば窓から富士見え	同
左側歩き留学生と知れ ・	同	暖房のチンパンジーが羨まれ 大阪市	山田 蛙水
同じ日に葬儀重なる日の寒さ 今治市	越智 一水	指の先動いて笑う点訳書	同
ハンカチへ春をつつんで子が帰り	同	赤ん坊が生れ文鳥ほ と とかれ 津市	嶋野ひ呂し
パーマやが遠くに越した様にふけ 大阪市	福富 隆子	公務員鳴かず飛ばすで首つなぐ	同
末っ子はニキビを早く出したがり	同	軍隊のメシ食って来たのに平社員 大阪市	西本 保夫
本堂にスカートの膝もてあまし 東京都	奥津啓一朗	世間から守ってやる気かA少年	同
口笛の女友達欲しくなり	同	恩給が下れば孫にすぐとられ 高知県	山川 勝子
神経痛忘れて孫を抱きあげる 青森県	岩淵 一星	おぼろちゃん は居眠りテレビは洋画です	同
十円で握手もされるバスガール	同	妻の目に隣近所が派手すぎる 見島市	伊丹柳瓢子
煉炭の匂う上手なくらし向き 大阪市	藤富 淀月	借金を派手に着て来る参観日	同

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

ものまで入選句として選出さなければならぬ義理も責任も背負わされた訳ではないのだから。恐らく主権者側としてもそこまでは望んでいないであろう。従ってそんな所へ逃げを打つのは、誠に卑怯な話で、選者の無能さを暴露しているようなもので、感心した話ではないしN氏らしい言葉とも思われない。

少くとも私達は一応川柳人川柳作家として常にものをいっているので、〃没句を見て俺の選の批評をしろ〃なんて、いわば相手を軽蔑したような言辭は弄したくはな



信心を云わずに涙もろい人 玉島市 水粉 千翁

人間の不びんさ謀りごと覚え

同

仰げば尊し卒業式へパトロール 大阪市 米浪進之助

角砂糖茶房でとかすうぶな恋

同

あの頃の精神を云う義手の人 八戸市 狛守 和穂

そこまでは春がきたぞと二月堂 石川県 大山 雅城

生花の個性はつきり池の坊 松江市 岡崎 雪美

ほろ口へ女のケチが釣り込まれ 七尾市 松高 秀峰

一揃い揃えてスキーヤーになり 河内長野市 森本黒天子

独り者春よ三月昼寝する 尼崎市 出野 耕一

人事移動たらいまわしをくりかえし 松江市 岡崎 祥月

看護婦の冷たい指で注射され 遠野市 鈴木 二文

スーダラを歌って妻と会える日よ 羽曳野市 大谷 樞雄

浮気した弱身に妻の春着聞く 和泉市 末田 晃康

合格のしらせに眼鏡かけ直し 兵庫県 斎藤たけお

子沢山光を胸に耐えて生き 笠岡市 佐内 隆文

朝刊へ父の朝食はこばれる 石川県 南伝 一

独り旅の気安さコーラ落花生 大阪市 和田 旋鳳

線香に親子の縁はまだ残り 岡山県 川村 春光

めっきした一と旗そろそろは始め 京都府 西村句楽坊

ガリ勉はほんの一分よく使い 羽咋市 三宅 ろ亭

巡礼のバスも転落して奈落 茨城市 高木繁太郎

春の雪また着ぶくれた寄附がくる 笠岡市 谷本鈍愚坊

詠術だけからだのがたとは逆にさえ 大阪府 石田 新石

神前を素通り出来ぬ試験前 金沢市 根上 杏花

外遊の父に教える程育ち 豊中市 三木 樞林

ストッキング直しては娘が通り 島根県 松本 昌

読み飽いてお茶の香りに欠伸する 大阪市 古川 鶴声

母の日もモンペの妻がいじらしく 岡山県 永宗 宗義

旧友の進学就職他所に病み 岡山県 梶川 信子

あまりの手際へ警察官もひっかかり 大阪市 山地 判志

金の要る話し世話だけ残り 神戸市 吉田 隆史

無茶云うた方が泣いてる口喧嘩 兵庫県 藤井雅佐女

赤電話あまえてすねてはなれない 大阪市 武居寿美司

い。

——一九六三、三、一九記——

★

東天紅さんのこと

プロ野球にもホームランバツターというのがある。さしずめ東天紅さんなどは、そのホームランバツターなのであろう。

ホームランには風で柵越えするものもあり、足で敵失を利用してホームランにするものもある。だが、川柳にはそれがない。あくまでも句本位である。しかし、その時の題によって、優秀句の多い場合と、その反対の場合もあるだろうが、とにかく数百の中から選ばれるには、それだけの「作品」でなければならぬ。

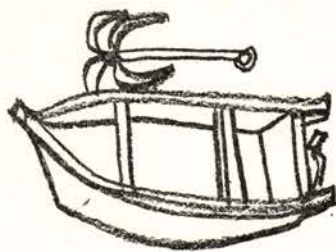
三十年の柳歴をもつ人が、あの不朽洞賞カップが、どれくらいの重量があるか、一度持ってみたいと言っておられた。

川柳まつりの大桶はどれくらいの重量かな?と思われる人もあるであろう。それを東天紅さんは両方とも知っておられるのだ。

句

評

リレー



大 阪 市 橋 高 薫 風 子
東 京 都 山 根 白 星
岡 山 県 永 松 東 岸
大 阪 市 西 田 柳 宏 子

抱き合って互いに鼓動聞いていた 一三夫

薫風子―白星、東岸、柳宏子諸氏は小生顔見知りだから歓談しているようなつもりで句評に對する評も遠慮なく出来るといふものです。では早速始めます。

息詰る男女愛欲のシーンだが、緊迫力が薄れているのはリズムが流れ過ぎてゐる故か。他人事のようには受取れるとはいひ過ぎだろうが、感動を著しく弱めているように思う。句の調子に曲折があればと惜しく思う。結びの過去形も是か非か問題にして一通り批評が欲しい所だ。

白星―薫風子氏の適切な評に尽きる。

胎動をさわらせている夫婦仲

(三太郎)

古い句を連想しました。拙句で恐縮だが、

愛人へ動悸を知らず手を誘ひ

ひとひねり曲折をつければ生きてはしないか。結びの過去形に付いては、

椅子の背にもう青春は消えていた (路郎)

余韻があつて、過去形の方がいいように思う。

東岸―愛欲のシーン描写もまだんだん川柳に現われて来ました。しかし迫力があり過ぎてもどうかと思われまふ。此の句の場合、抱き

合って鼓動を確かめているような一瞬のポーズを掴んだものと思えますが、すぐれた着想だと思えます。結びの過去形に就いてはそれで良いと思ひます季賛さんの句に「特急に蠅が乗っていた乗っていた」のように句に力強さを見える点で有効だと思ひます。

柳宏子―私はこの句からは初めて抱擁した若い二人のピンと張りつめた神経を感じます。半ば恍惚とした上句の中に、一抹の期待と、不安を下五で表現したものとしてその手法に敬服します。所謂愛欲シーンの描写として見ると諸氏の言われるように、物足りなさを感じますが……

薫風子―語尾の過去形は東岸氏の言われるように句に力強さを与える作用をしているだろうか。白星氏の言う如く余韻があつていいと言えるだろうか。この過去形は曲者だ。余り立ち入って考えるから曲者に見えてくるのであつて、或は何んでもない（とりたてて言うこともない）のだからとも思う。この句私には激しい行動の前後の感じを抱かせるのだが、柳宏子氏の評に接しては、語尾の形は、成程と納得が出来もする。焦げつくような愛欲かムード的恍惚境か句意は双方にとれるが句主の立場からの発言も欲しいところ。

白星―刻、一呼吸、両力士戦闘

開始か……、終了後のエクスタシイか、何れにしても、スムーズに詠みすぎて感動が薄い。

東岸―句意が二通りに取られるというのは、うがちが足りないのて甘さがあるのでしょうか。愛欲のシーンにしては迫力が足りないのも、客観的な見方をしている故でしょう。若い二人と考えても自分の鼓動を聞いているのでしたら納得できますが、相手の鼓動を聞いているようにとれますので表現がオーバーだと思ひます。

作者の登場も面白いでしょうが、私が以前胃を病んで休んでいた時「ハンスとで胃病を直すつもりかや」の句を発表し、句評リレーに取り上げられましたが、胃病で休んでいる時の句とは断つておりませんので、薫風子さん、白柳さん等の批評で冷たい、あたたかいと受けとり方が分れましたが、この句は句評リレーに取り上げられて批評してもらいたいと考えていたものです。一三夫さんのこの句も実験的な句いがするので

柳宏子―皆さんに言われてしま

つて言う所がなくなつた格好になりましたが、確かに白星さんの言われるように余りにもスムーズに詠まれたところに弱さが出てゐるといえましよう。然し私は……何かにつけて若い私は……この句

を若い二人の抱擁として頂いておきたいと思ひます。

大河ゆうゆう歴史を超越して流る 弘道

薫風子―大きい真理を詠んでいる。然し余りにも真正直過ぎた。

古くから絵になり、詩になり、文章になつてわれわれの心に映っている事柄なので新鮮さが無い。大きい事柄を詠むことの難かしさを思わせられる。

白星―これも亦前任者の評に賛。「歴史を超越」なんて古い古い。

東岸―ゆうゆうたる大河の流れを詠んで見たい誘惑を感じないでもないが、仲々むづかしい。大胆に真正面から取り組んでいます。それより小細工をするようですが、やはり小道具を使う必要があるのではないのでしょうか。人物が現われて来ないのが何より物足りない。

柳宏子―誰しも一度はひかれる題材だが、みなさんの言われる通り仲々難かしく、独り合点の句となつてしまつてゐる。東岸さんの言われるように小道具を使う……白柳氏がよく「具体的なもの」と言つておられるが……ことが大事でしょう。この場合も単なる「大河」とするよりは「〇〇河」と打ち出す方が一層その地域感が出て、その河にまつわる歴史が読み

人を打つのではないでしようか。

蕉風子―人物を挿入するといふ東岸氏説に賛成だが難事だ。成功すれば吉川英治著の三國志の書出しを彷彿とさせるのだろうか。

それでもそれだけ大時代的で現代人の感覚は大河から宇宙の方へ飛躍してしまっている。句の構成に大まかな熟語が三つもあるのが、句を散漫にしてみた因か。句の表に表わされた味わいのある味、句の裏にひそんだ深い味、或る時はその一つが、又或る時はそのどちらかが作品には欲しいのだが、この句は対象が大き過ぎた故か表裏の味が把握出来ずにしまった。

白星―川柳には、人間の臭い、といったものが必要。これでは川柳にも俳句にもなっていない。

東岸―大河にのぞんで句に点景としての人物を配するというのは大時代的であるかもしれないが、感懐としてはそれぞれ異った味が出せるのではないかと思う。つまり人間臭が欲しいということである「○○河」として地域感を出すのも一つの人間臭である作者の飛躍を期待したいものです。

柳宏子―大分手厳しい評が出たようですが、みんな私に言われていのような気がします。川柳人と

してのものの観方、表現の仕方というものが如何に厳しいか、自分では判っていても、それを如何に人に感動を伝えるか、弘道さん一つ一緒に勉強しましょうや……。

或る日ふと以前の家の方

去に

蕉風子―転居した当座はこういう風なことが往々に起り得るのであろう。想像は出来てはほえましい題材だが、はっきりした実感の伝わってこないのは私にそういう経験がないからだろうか。作者は極く近い距離のところに転居されたところなのでこれは実際に経験されたのを詠まれたに違いない。

「ふと」という語を使っておられるが、句全体にはと気がついて自ら微笑を禁じ得ないといった感じが稀薄だ。

白星―又もや提灯を持つ気味があつて、くやしき限りであるが、蕉風子氏の評に賛。言い尽してしまつた。

東岸―蕉風子さんの評に尽きていますが、実感のある句にしろ表現力が弱いと読んで感銘が薄いわけです「或る日ふと」が句を生ぬるいものにしてしまっている。豆秋さんがこのような経験をされたらどう読んだらうか聞いて見たいような内容ですが、それを適度に無駄なく表現するのはむづかしい

ものです。

柳宏子―私もよくこうした「ふと」を使いたくなりますが、確かにビツタリの表現出来る時は少ないですね。句意のボヤケが目立つと思ひます。微笑ましい情景……或は本人にとって深刻な考え事で余計肚が立つかも知れませんが……ありそうなことです。

蕉風子―東岸氏が豆秋さんの名を出された。偶然だが私もこの句を拝見した最初に豆秋さんをおぼえたのです。豆秋さんは句に大や場やひよこや糞虫やその他種々雑多の動物をかりて、持ち前のユーモアと哀愁の味を深められた。この句にも大などを登場させて、自分だけでなく大までもがという風ないい廻しが出来ればはほえましさは倍加しただろう。これは私の寸感に過ぎず、まして難しいことはいうまでもないが。

白星―実際に経験したことを、素直に正面から描写するのは、特種の場合を除いて効果は薄い。芸術写真もアングルの考慮によって生じる。

東岸―蕉風子さんも豆秋さんをおぼえられたというのには句に豆秋さんの持つユーモアに似た感じがするからでしょう。この作者もユーモアを多分に持っておられるに違いない。

柳宏子―白星さんの言われる芸術写真のアングルの効果とは本当にうまいこと言われたと思う。作者が「ふと元の家の方へ行つた」その時の心理状態が①只漫然と所謂呆つとして、②考え事……色々あると思うが……をしていて③感情的になつていて、が「カメラ」アングルと同じように表現方法が変れば更に佳い句になつてくると思ひます。

危機はらむ対談オルゴールが鳴り

白香

蕉風子―「危機はらむ対談」という表現が生であると思う。大ざっぱというかほろり出した感じであるから、緊張と緩和との対照の妙で句の効果を出そうとする意図もそぐわぬ結果になつてしまつた。一見これでも通用する表現ではあるが、私は「危機はらむ対談」を具体的に下の句に一層ふさしい語彙を把握発見する慾が欲しいと思う。

白星―モチーフは判る。上の句を焼き直せば、いい句になるかもしれない。只ボクなら、多少句の勢いは弱まるかもしれないが「鳴り出すオルゴール」と句調を整える。

東岸―「危機はらむ対談」を具体的に表現して欲しい。破調の句をうまく仕上げられています



「オルゴールが鳴り」というのは時計の事と思ひますが、緊張と緩和を表現する場合時計の事を持ち出すのはたびたび読んだ気がしますが常套手段めくのを避けて、破調の句にしオルゴールを持ち出されたのはわかります。内容に新鮮さが盛られているとは思ひながら

柳宏子―ここにも荒らさというか、独りよがりが出ている。作者には対談の重大性も判り、それに對する、オルゴールを配して対象的なところをねらっているが、読む人にはその対談そのもののピンとボケている。情景は、はっきりと具体的に……例えば「危機はらむ団交」とでもすればその緊迫

感と、それに反するのどかなオルゴールの組合せが面白くなると思われます。

薫風子—対照の妙で句の効果を高めようとした意は、それが常套手段であるにしても良いことだと思ふ。私など表現技巧の工夫やリズムへの配慮、語尾の形などの創意と、作意との区別がつかない未熟者なので、作意のないところに進歩なしとまで極言したい程なのだ。作意が過ぎて奇体な句になろうと、それは精進するうちに自然らしく見せる(この言い方は誤解をされそうだが)手練を会得出来る筈である。一時川柳誌を作意過剰の句で氾濫させて見たいと思う程に現在の多くの句に作意がなさ過ぎる。作意を如何程強調しても伝統派の作家の作意は一部前衛派の作意はとも隔くはなからうから。

白星—薫風子氏の「川柳作爲論」については同感。「危機はらむ対談」では生硬で苦心のあとが、うかがえない。

東岸—常套的手段を用うことは非常にビッタリしたとき以外は新鮮さに欠けるうらみがある「川柳作爲論」そのものには敬意を表しますが、この句が実感のあった句にしろ上すべりしていて作爲を感じさせるのが不満である。

柳宏子—又々難しい話になりました。私は川柳からは作者の作意の見えすぎたものは矢張り頂けない気がする。勿論進歩向上の過程に於いて作意の勝った時期があることは認めるし又そうした過程にぶつかった時が一つの壁であろうと思つてゐる。この句からは私は作意というよりも、練り直してみて頂きたいと思ひます。

老らくの頑固同士の無言劇

ひ呂し

薫風子—老來の頑固さが表現出ていて面白いと思う。無言劇が効いている。濁音の効果が句の内容にマッチして落着いた一句に仕立てた。

白星—ボクは逆に無言劇に一寸ひつかつてしまった。普通「バントマイム」と呼んで「無言劇」とはいわず耳なれない為かしら。それさえボクの感じ過ぎであるなら、一寸面白い句だ。偶然の一致ではあろうが、脚韻を踏んでいるのもいい。

東岸—「四十年添えば無口で足る妻」という千容さんの一路集で天位になった句があり、この句にひかれてゐる為かこれとは対照的なトラブルの句であるが、少し物足りない気がしてならない「無言劇」で一応救われているがこれとても白星さんの言われたように

抵抗を感じる「バントマイム」にしてもいだけない着想は面白いのだが表現に難があるように思う。

柳宏子—身近にこうした情景を見ることあるからかもしれないが、面白い上手いと思う。「老人の」うける感じが、「バントマイム」という近代感覚より寧ろ「無言劇」の方が仮令新造語的のものであったとしてもビッタリしているのではないでしようか?

薫風子—一語の魅力を生かして一句を成すということ。恋人から貰ったネクタイにびったりとした背広をわざわざ造るといったことは誠意あふれる行いである。こういうことが作句の上にもあつて然るべきだが、そんな場合は往々ネクタイの方が榮えて、全体としつくりせず所謂緊接川柳に終ることが多い。この句は至極自然で何もかも調和していることがない。こういうところの句が無言劇という語彙に魅かれて出来たような感ぐり方を私がしているようで句主には迷惑だろうが、私は無言劇という兼題で取り組んでもこれ位の自然さとこれ位の水準を持つ句を常に創りたいということが言いたかつたのである。句は整つて良いと思うので前回の評でとどめ感想を述べさせてもらった。

白星—毎度のことであるが、こ

の句評リレーでは所謂多少難はあつてもいい。問題作野心作といったものを、組上にのせてもらいたい。かかる観点からは、今回の一連の句も、魅力(すんで論評を加えたいという欲望)に乏しい。

東岸—白星氏に同感、そして我々も酷評にお届けず問題作野心作を発表する努力をしたいものです。自分で納得のいく作品が出来ないに諸氏の作品の批判をすることはまことに苦しいことです。妄評をお詫びします。

(担当・真鍋一瓢)

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(186) 五十嵐さか江

- (一) 五十嵐 (二) さか江 (三) いがらし (四) 青森県北津軽郡金木町
青野 (五) 明治41年12月27日 (六) 青森県上北郡辺地町 (七) 公務員
▲森林官V (八) 金木・三二一

(九) しぶ柿の明日をあせらず年を越し (一〇) 野球、スキー (一一) 有 (一二) 昭和元年十二月

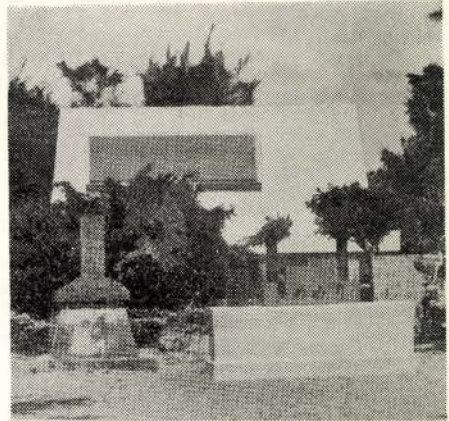
(187) 西辻竹青

(一) 西辻政男 (二) 竹青 (三) 谷堂 (四) 奈良県宇陀郡室生村字滝谷五六 (五) 明治36年6月6日 (六) 現住所 (七) 無職 (八) 三本松局七六番 (九) 自筆論議は遊んでおれと言う (一〇) 書・長唄・謡曲 (一一) 有 (一二) 昭和二十一年四月

(188) 松川杜的

(一) 松川茂 (二) 杜的 (三) 楓山 (四) 京都市南区西九条開ケ町十三 (五) 大正4年9月3日 (六) 三重県伊勢市 (七) 国鉄職員 (八) 三九局・五四三三八呼 (九) 子の風呂は長こても短こても叱られる (一〇) 都山流尺八 (一一) 有 (一二) 昭和十六年頃





沖繩紀行

若本多久志

出 発

一昨年、夏の高校野球大会に出場した沖縄の選手達が戦い破れてベンチに引上げる直前、つかつかと場内中央に走り寄って、甲子園の土を一握りずつ持ち帰ったあの風景は、我々の脳裏に今も強く残されているが、更に昨年三月、ケネディの沖縄統治新政策の一端として許された、国旗（日の丸）掲揚に対する島民の異状な歓喜、これ等一連の事情を推測して、祖国

復帰の悲願に燃える沖縄を具に視察し、世界戦史にも稀な激戦地だったその戦跡に、静かに眠る十六万英霊の冥福を念じようと、我々一行は去る二月十八日、午前九時、うるさい出国手続もすませて、CTA（民航空運公司）の大型機で伊丹空港を飛び立った。
日本の領土へ行くに
ドルが要り
やがて桜島の噴煙を下に見、雲海の上を行くこと約二時間、雲間が切れると、東支那海の青い空と

復婦の悲願に燃える沖縄を具に視察し、世界戦史にも稀な激戦地だったその戦跡に、静かに眠る十六万英霊の冥福を念じようと、我々一行は去る二月十八日、午前九時、うるさい出国手続もすませて、CTA（民航空運公司）の大型機で伊丹空港を飛び立った。
日本の領土へ行くに
ドルが要り
やがて桜島の噴煙を下に見、雲海の上を行くこと約二時間、雲間が切れると、東支那海の青い空と

復婦の悲願に燃える沖縄を具に視察し、世界戦史にも稀な激戦地だったその戦跡に、静かに眠る十六万英霊の冥福を念じようと、我々一行は去る二月十八日、午前九時、うるさい出国手続もすませて、CTA（民航空運公司）の大型機で伊丹空港を飛び立った。
日本の領土へ行くに
ドルが要り
やがて桜島の噴煙を下に見、雲海の上を行くこと約二時間、雲間が切れると、東支那海の青い空と

復婦の悲願に燃える沖縄を具に視察し、世界戦史にも稀な激戦地だったその戦跡に、静かに眠る十六万英霊の冥福を念じようと、我々一行は去る二月十八日、午前九時、うるさい出国手続もすませて、CTA（民航空運公司）の大型機で伊丹空港を飛び立った。
日本の領土へ行くに
ドルが要り
やがて桜島の噴煙を下に見、雲海の上を行くこと約二時間、雲間が切れると、東支那海の青い空と

那覇にて

海とが窓一つばいに展開される。あくまで青い亜熱帯特有の美しい空と海！そして珊瑚礁の島々に打ち砕ける白い波濤が何とも言えぬ印象的だった。
南渡の海の青さが眼に沁る
戦艦大和に沈みぬ熱帯

那覇にて

海とが窓一つばいに展開される。あくまで青い亜熱帯特有の美しい空と海！そして珊瑚礁の島々に打ち砕ける白い波濤が何とも言えぬ印象的だった。
南渡の海の青さが眼に沁る
戦艦大和に沈みぬ熱帯

那覇にて

海とが窓一つばいに展開される。あくまで青い亜熱帯特有の美しい空と海！そして珊瑚礁の島々に打ち砕ける白い波濤が何とも言えぬ印象的だった。
南渡の海の青さが眼に沁る
戦艦大和に沈みぬ熱帯

海とが窓一つばいに展開される。あくまで青い亜熱帯特有の美しい空と海！そして珊瑚礁の島々に打ち砕ける白い波濤が何とも言えぬ印象的だった。
南渡の海の青さが眼に沁る
戦艦大和に沈みぬ熱帯

裏によく似ている。曇下りというのに赤い顔をした米兵が三々五々ウロウロしている恰好は、沖縄悲劇の一面を見せられたようだった。

又この裏手の方は、ひめゆり部隊で有名な県立一高女や女子師範の校舎があった処だそうだが、今は一体に米兵相手の青線地帯になっていて聞き、そのひにくな現実には思わず嘆息をもらした次第である。

肩組んでゆくパン助も生きる道茲で一寸、沖縄の気候についてふれておこう。平年ならば二月の下旬頃でも上衣を脱いでワイシャツだけの軽装でおられるのに今年は全国的な寒波で、少し変調だとのこと。それでも午後気温はグッと上がり、合オーバーを脱いで汗ばむ位、朝夕が少し寒かったのは風が強かった勢だろう。

観光パンフレットによると沖縄は一年のうち八カ月が夏で、平均気温二十二度、厳冬の最低気温でも十度という亜熱性気候の暖国であるそうだ。

ホテルの女中達が内地の話聞きたがるので東京や大阪の話をしてやったが、一番驚いていたのは軒下まで積った北国の雪の話であった。

北国の雪の話を土産にし
お水取りすまめにここでは汗をかき

戦跡めぐり

我々のホテルは、東支那海の荒波が打ちよせる海岸通りなので、激しい波音に暫くは寝つかれなかったが、旅の疲れにいつの間にか夢路をたどり、ドアをノックする音に目覚めたのが翌朝八時、バスの迎えにくる時間を気にし乍ら、実に不味い朝食を終える。

愈々今日は念願の戦跡めぐりである。幸に一行の中に当時の戦争に参加し戦傷の為に生き残ったというある鉄工所の社長さんが居られて、バスの中でガイドの説明の合間、合い間に地点毎の戦況について詳しく説明されたが、その

戦史は哀れにも又悲しい物語りで、一同は只胸せまる思いであった。

説明のガイドの声もふるえが三カ月に渉る激戦で、敵味方二十余万の将兵が散華し、母親の背に眠る乳のみ児や、いたいたけない学童達、やがて嫁ぐ日を夢みていたであろう制服の乙女達、その未来に大きな希望を抱いていた青少年達、そして毎日を平穏に過ごしていた多くの島民がこの地で救いもなく銃火の下に死んでいかれたことを思い。又、豊かな砂糖キビの茂りや、無心に咲く野草の花は変らないが、その大地の奥深く、最愛の子を亡くなった母親の涙が、頼る

夫を亡くなった妻の切なさ、親兄弟を亡くなった肉親の悲しみが声もなくこもっているのだと思えば、この胸が掻きむしられるようであった。

草むらにまだ白骨が残るよう殊にひめゆりの塔の前にある壕でも、健児の塔のある摩文仁の洞窟でも、入口の岩石に火焰放射器で焼かれた跡がまざまざと残っており、鬼気迫る感で肌を粟を生じるようであった。

洞窟の前香煙のたゆるなく

戦後、村人達が拾い集めた無慮数万という遺骨を葬った魂魄の塔は、所謂無名戦没者の碑で、かわらに桜の木が一本、桃のような

花を咲かせていたのは生涙流転の無常を深く感じさせられた。

更に、当時の司令官牛島中将等最後の地に黎明の塔島田知事以下職員、戦没の地に島守の塔、女子看護隊の白梅の塔、その外内地各県の戦没軍人を祀る碑は枚挙にいとまない位、戦跡の丘に建てられており、我々はそれぞれに念仏合掌し、み霊あかれと冥福を祈念して廻った。

み霊ただやすかれとのみ合掌す

琉球踊り

戦跡巡りでいささかノイローゼ気味になって帰って来た一行は、その夜七時から、沖縄エアースー



牛島司令官の墓前と多久志氏



パイナツツル畑にて多久志氏と夫人静さん



守礼の門にて多久志氏

ビス会社の歓迎晩さん会に出る。
珍らしい琉球料理に舌つづみを
打つ味ではなかったが、強い泡盛
の酔いにうっとりし乍ら、美女達
の琉球舞踊を見せてもらった。哀
調をおびた蛇味線の音に合せて踊
る女達は戦争の悲しみも知らぬげ
に只、今日を生きているという表
情であった。ただ色とりどりの古
典的な衣装の美しさと、その異国
調に旅情をそそるものを感じさせ
られた。

旅情をそそる蛇味線の音の哀調さ

国頭及中頭めぐり

沖縄を三つに分けて南部を島尻
(昨日廻った戦跡地方)中部を中
頭、北部を国頭とよんでいる。そ
の中頭と国頭の一部分を見て廻るの
が最後のスケジュールである。

概して中部以北は戦禍の影響も
少なかったため、昔のままの沖縄
風景が見られると聞いていたが、
なる程この海岸の景色は山の緑と
海の青さがマッチして実にすばら
しかった。

白帆こそ見えねど春の海らしく
能登の九十九湾や、陸前の松島
を彷彿とさせるような処も何カ所
があり、万座毛の切り立った隆起
珊瑚礁の上、一面に敷きつめた
自然の芝生、断崖に打ちよせる白
い波等、立ち去るのも惜しくいら
いであった。

万座毛とは三百年程前の国王尚
敬が「万人を座らすに足る」と言

って命名されたものらしい。
国王巡幸それからの万座毛

此処から更に北上、広い名護湾
を抱えこむようにして続く海岸線
が七曲りの名所である。湖のよう
な湾内は小波さえずなく、七曲りの
山影も深い青海の中にもすいこまれ
て平和と静寂のものであり、謡
曲竹生島の「緑樹影沈んで、奥、
木に昇る景色あり」という文句を
思い浮ばせた。

黙々と歴史を語る海の色

名護の町にはこれという名所も
なかったが、二月中旬というのに
桜まつりの最中で、家々の庭や、
小高い丘の上に赤い桃花のような
沖縄桜が満開だった。

この呼びものは、三月から四
月にかけて海の水がぬるむ頃、イ
ルカの大群が湾内に押しよせて来
て、漁師ばかりでなく町民挙げて
イルカ狩りに格闘する有様は、名
護町にとって欠かせない風物詩だ
とのこと。イルカが何故名護湾だ
けに寄せてくるのかは今でも謎と
されているが、とにかくこののん気
者のイルカ漁は一回で八十頭から
二百頭に及び、最大の町収入にな
っているらしく、町長が陣頭指揮
で采配を揮うそう。

名護の丘桜の色も寂しげに
名護の町で中食を終え、今帰仁
(ナキシン)半島に入る。ここに
は六百年程前の今帰仁城跡がある
が、これはガイドの説明を聞いた
だけで見物を割愛し、戦後盛んに

なったバイナップルの栽培地を訪
れる。

試食に渴を癒し、お土産にと各
々が二三個ずつ買って帰ったが
(一個二十セント)重いので閉口
した。

内地なら儲かりそうなバイの山
それから山越えに横断して東海
岸に出る。この辺が沖縄戦の火蓋
を切った米軍上陸地点、宜野湾で
ある。

島尻に上陸と見せかけた敵は、
マンマと日本軍の虚を突いて、大
した抵抗も受けずこの砂辺の海岸
に上陸、以来八十日死闘が繰り
返された訳だ。

ここから西、小高い丘一体に米
軍の極東戦略基地である嘉手納
(カデナ)飛行機があり、附近に
漂う要塞基地の重々しい雰囲気
が旅行者の心を暗くする。

ナイキ基地いずれの国を守るぞ
や

日本領土の都市で只一つ、片仮
名で市名を表わすコザ市は十八年
前まで、人口七千位の農村だった
のが米軍基地となつてから急激に
発展?し、那覇に次ぐ沖縄第二の
都市である。然し市民の業種の八
十％は米兵相手のサービス業で占
められている有様はただ、寒心の
外はない。尚コザの市名由来が、
占領当時の司令官が通訳(多分二
世だろ)の誤訳をその儘本国へ

報告したメンツからその通りに決
ったのだというに到つては、我々

日本国民をバカにした話であろ
う。

西部劇のセットそのままコザの
夜

長い長いバスドライブにも余り
疲れを覚えなかったのは、道路の
お蔭であらうが、島内の主要道路
は凡て、米軍管理で補修もよく行
き届いた二本線又は四本線のハイ
ウェイである。

すばらしい道路有料かと思ひ

洗骨と墓所

沖縄人は墓を大切にし、金をか
けた立派な墓を誇り、又これを一
つの財産として売買することさえ
あると聞いていたが、先ず人が死
ぬと棺に入れたまま墓所に入れて
おき、三年経ってから近親者寄っ
て洗骨をする。洗骨とは死体から
骨を拾い上げていちいち、布ぎれ
できいに拭いて、骨壺に納め、墓
所内に安置する。これで一応その
人の葬式完了ということになる。

我々は一寸奇異な感に打たれる
が島民の間には死後の洗骨を厭
求する風が強く今も行われている
とのこと。こうして先祖以来多数
の骨壺を安置する為にも墓は大き
く、内部は六畳間位の広さのもあ
る。型は破風型と亀甲型とがあ
り、後者は門中墓といわれる一族
の墓所である。

上部が人間の腹部のようにふく
れた形になっているのは、腹から
出て腹に帰るという意味からだ

いい伝えられているそう。
成仏をするに三年待たされる

結びの言葉

首里城跡の守礼の門や、博物館
での珍しい品々、古典芸術の紅型
(びんがた)工房のこと等、書く
ことは数限りなく残っているが与
えられた紙数も尽きたので結びの
ペンとした。

観光旅行といえれば凡て楽しく、
朗らかなものと思つていた我々に
とって、今度の沖縄程重々しい気
分の旅行はなかったと思う。

赤瓦の屋根に住む島民はいささ
かでも米軍基地に依る収入で程々
の生活を支えており、カヤ葺の家
に住む農民は依然として貧困者で
ある。重要な産業とてなく、日本
政府の施政すら届かないこの島の
人々が、戦争以来、内地国民の犠
牲となつて今も尚、黙々と働いて
おられることを思う時、やれ所得
倍増だ、産業の高度成長だとレジ
ヤームに酔うている我々は、

深い反省を以て、彼等祖国復帰の
悲願を一日も早く叶えてあげるべ
き運動を強化しなければならな
いのではない。観光最終日のコー
スで米軍司令部の前も通つたが、
屋上高く星条旗がへんぼんと風
になびいているのを見て、うたた感
概無量であった。

興亡の歴史を茲に守礼の門
(三八、三、三〇)



写真説明 (前列・左から) 操子・狂二・野添路・旅風・路郎・菅乃・漢南・梅志・す・む・(第二列左から) 生堂・清子・一栄・雄声・春果・多久志・生々庵・緑雨・清瀬・興昌志 (第三列・左から) 史子・一鶴・び女・柳志・静馬・吉太郎・花智・八郎・小松園・古方・文蝶・竹紅・白柳・きさ子 (後列・左から) 孝翁・白木・東天紅・文秋・薫風子・舟遊・一三夫の諸氏

不朽洞会總會

麻生路郎・葎乃両先生の
金婚祝賀記念事業協議ほか

不朽洞憲法堅し

開会の辞

松江梅里

挨拶

理事長

中島生々庵

挨拶

麻生路郎

議事

(一)規約改正の件

(二)役員改選の件

(三)両先生の金婚祝賀記念事業に就いて

(四)その他

というプログラ

ムで進められ、

兼題三題のあと

第二会場である

「喜楽別館」で

懇親宴開催とな

っている。

生々庵不朽洞

会理事長は、33

年11月16日に総

会をひらいてか

ら五年になるが、この五年間、総

会を開催しなかつたのは、いうな

ればこの五年間は平穩無事だっ

た。とこの挨拶のなかで語られた。路郎師はますますお元気であるが、相変らず柳務のはげしさの中にあって、来年は喜寿と金婚式が重なるので、そのご多忙さが倍加されることであろう。しかし、やりたい仕事や過去の整理もしたいと言われ、来る日も来る日も、二十四時間と取っ組んでおられる姿があった。「この総会で皆さんの顔が見られることは、ホントに私のよろこびである。この上ともに横のつながりを堅くして、よりよき人生を送るように心がけてほしい」と結ばれた。

この記念すべき三月十七日に集った人々の記念撮影をすることに なったが、写真屋さんの時間の都合で、後から出席した方々にはいっていただけなかったことは残念だった。中島生々庵氏を議長にして、会の運営から規約改正など「不朽洞憲法」を中心に活発な質問があった。多久志氏が、不朽洞会会則を第一章から第四章まで朗読され、文蝶、生堂、す・む、薫風子諸氏はか、熱心な発言もあったが、結果的にはこれといった改正もなかったことである。薫風子氏発言のなかに、不朽洞会へ入会の資格に就いての一件は当を得たもので、後日第二章会員の項に書き加えられる数行があるかもしれない。会費値上げなども検討されたが、その額については、理事長一人ということになった。改選後の三役と常任理事は左の諸氏である。理事長中島生々庵、副理事長若本多久志、副理事長松江梅里(以上再選) 常任理事、西尾榮、北川春果、土井文蝶、川村好郎、黒川紫香、正本水客、戸田古方、西いわを、小川恒明、水谷竹荘、橘高薫風子、西田柳安子、傍島静馬(以上再選) 清水白柳、菊沢小松園、金井文秋、辻圭水。(理事は従来の

続

川柳書架

(29)

野良犬

(後藤青柳鬼著)

★巻頭に金子吞風、藤井紫苑、米山くにお三氏の序がある。

★本書は第二自選句集で句は漢字に片カナ交りで発表されている。

★昭和三十七年十一月三十一日発行。新書版三三ページ、頒価百二十円。編集兼発行人は飯田市知久町三の四六後藤ゆきを。

★著者は飯田天柳吟社同人。

川柳読本

(岸本水府著)

★本書の巻頭に水府氏の自序ならびに目次がある。

★本書はごく初心者向きに書かれた川柳手引きといったもの。

★昭和三十七年十月六日四版発行。新書版五八ページ、定価八〇円、発行所大阪市西成区有楽町九番

川柳文庫。

諸全員再選)

路郎、葦乃両先生の慶事がいよいよ来年にせまっているので常任理事諸氏の動きも熱をはらんできた。わが不朽洞会は幹部諸氏が特に高潔で、しかも人情家ぞろいだから、われわれ会員も安心して、その指さす方へ信頼してついて行けるといふものである。

善意という車輪で回わる不朽洞会は、あすの柳界の動力であり、しかも生々庵理事長を軸に、多久志、梅里両副理事長と組んだクリンアップトリオには強力なるパンチがある。

兼題披露も総会も時間どおりに進み、場面は第二会場の懇親宴会場へとスイッチする。

(一三夫)

懇親宴

橋高薫風子

懇親宴は第一会場の一筋北の通り、「すき焼たっぶり、お風呂へゆっくり」の喜楽別館雲仙の間で午後五時から開催された。

松江梅里氏がここでも司会をさされる。

五時十五分、岩崎愛二氏が来席、一同拍手で迎える。

路郎・葦乃両先生を中心に、不朽洞会員各自思い思いのグループに分れてすき焼の鍋を囲む。

古老緑雨・野迷路両氏が相対さ

れたところはさながら頂上会談。

多久志・梅里・いわを・文蝶・栗・静馬の常任理事諸氏が一角を占める。

白柳・小松園・文秋の三新常任理事を囲んで生薑・す・む・舟遊諸氏の飲めぬ一団。左党は春巢氏だけ。

下山清湖氏はめつたに顔を見せられぬが、古方・梅志両氏と話が



中島生々庵不朽洞会理事長

な討論の肩をほぐし、将来の大きな夢を期して七時過ぎ散会した。

兼題「人」

麻生路郎選

五客

大臣を辞めて静かな人になり
人をくむことの出来ない妻となる
舟遊
鯉くちやな人と思ふ恋のうた
春巢
金貨して人の心が怖くなり
きさ子
人間になれと坊主に励まされ
文蝶

三才

人の世話出来てわ
が娘が嫁きおくれ
与呂志
子を持たぬ人とは
話くいちがい
春巢
人間はいいなと陸
下孫を抱き
一三夫

兼題「春」

中島生々庵選

五客

療養中で会へは初めてと言う杉本一鶴氏を囲んで、操子・きさ子・一栄・清子・女さんらの女流。療養経験のある舟遊・薫風子もその熱に賞讃を惜しまず歓談。す・む氏が会場スナップ写真をパチパチ。

最後に愛二氏立って路郎先生の健康と不朽洞会の益々隆盛ならんことを祈る乾杯の音頭をとられた。今回は懇親宴につきものの余興は一切なく、会員相互の有意義な交歓に終始して、総会での真摯

春の窓あけっぱなしで野良に出る

緑雨

やわらかい春の陽今日は炙を据え

梅志

制服で最後の春を母と出る

白柳

軸

移り香も春のけはいで妻の留守

兼題「ニュース」

若本多久志選

五客

死亡ゼロ不思議なようにトップ記事
ニュースまた飛ばして派手な未亡人
操子
ニュース解説政府のいたいところも
衝き
後日談ニュースで売れる週刊誌
旅風
風のようにニュース団地を吹き抜ける
高志
おめでたいニュース九千万がわき
狂二
電光ニュースわたしの町が燃えて
雄声
元閣下小さいニュースになって死
柳志

軸

ニュース今わが持株が暴落し

軸

集春聯

(西塚春魚著)

★巻首に、高須啞三味、大島瀧明大井正夫、川上三太郎の五氏の序がある。

★本書は著者が満洲における青春時代に詠まれた句の集録である。

(謄写)

★昭和三十七年十一月三日発行、

B6版五四ページ、非売品。発行所八戸市番町四〇川柳堂内はちの

へ川柳社。

★著者ははちのへ川柳社同人。

●疲労 ●食欲不振
●神経痛 ●肩こり
●便秘 ●つかれ目

アリナミン

無臭性 **アリナミンF**

タケダ薬品



入門講座

研究題「鍋」

清水 白柳

近頃流行の下取り交換をアルミ会社がデパートでやっているのを見たので作句したという作者の添書きで

破れ鍋まで下取り交換 商魂の

というのがありました。下五文字が尻切れとんぼのように感じてすつきりしない、これは商魂を上五へ持っていくのがよいのではないかと思う。『商魂は破れ鍋まで下取りし』となるのだが説明調になっちゃったようである。

イカケ屋ももうあきまへん
など鍋を取り K
鍋の底透して穴をたしかめ
る H

鍋の穴びよう打ったらなお
やぶれ 寿美司

穴あいた鍋に咲かせたチュ

弘朗

1 リップ
イカケ屋という語はもう過去の思い出にすぎないような感じを持たせるので使わない方がよいと思う、鍋を取りの取りもあいまいである、穴をたしかめるの句も、スケッチとしては一応ととのった句型であるが底が浅い、次の句の鉄を打ったらなお破れたというユーモアは生きている。作者の苦笑がそのまま句に現わされていて佳いと思う、チュリップを咲かせた鍋は深い鍋なのかどうか知らないがそこに作者の想像があるように感じた然し破れ鍋にチュリップ、それだけでも川柳があるのではないかと思った。

鍋底も磨いて女の独り住み

K

花嫁のけいこに鍋の尻こそ

げ

鍋の底みがく暇なしマニキ

津富

ユア

二号以下じゃないとプライドで鍋磨く M

鉄鍋の出臍と脚を子がいいり S

黒かった鍋を文化が白くする 寿美司

女性の独り住居に清潔感を感じて鍋底も磨いてあるだろうと作句されているが、女のというばくぜんとした点がこの句を弱くしている、女の中の清潔な暮しをするひとに焦点をしぼるべきである、鍋の尻こそは句品を悪くしている、同じ事を現わす場合であってもそれによって大きな違いが出てくることに注意してほしいと思う、マニキユアの句は成功している、それは鍋底とマニキユアをした指とのアンバランスに句が絞られているからだと言える、二号以下じゃないという句語は変だと思ふし、調子も悪いのでこれは『二号ではないプライドで鍋磨く』とすると意図とは違ったものになるかも知れないが調子ごととのうのだからであろうか、鉄鍋の句は珍らしい鉄鍋の脚を子供が鍋にこんなものがついているといった風景だが最後はこんな鍋のあ

る家は少ないと思う、恐らく都会では見当たらないので田舎へ遊びに行った子がそれを見つけていじっているのを句にしたのかとも思ってみたがそこ迄この句からは感じることが出来ないようである、黒かった鍋の句は面白い、文化が白くするという表現もいいと思う。

障子張り替えたまんなの鍋の糊 静水

平常あまり使わない鍋でのりを煮いたのであろうか、そのまま残っているのである。

テレビ料理うちにはあんな

酒

清



灘・魚崎

大塚合名会社醸

鍋がない

ひ呂し

鍋だけでなく材料にしてもサジにしてもあれだけ揃えるのは大変である、それをうまく諷刺しているのがよいと思った。

鍋かむり子供が出かける豆腐買

K

鍋さげて豆腐屋の鈴待ち

S

提げた鍋叩き豆腐屋戻らせ

T

つかけの鍋が豆腐屋呼び戻し 和三部

豆腐屋に鍋を洗わすひとり者 宗義

子供が出かける豆腐買というのは調子が悪い『鍋かむり豆腐を買いに子供が出かけ』とするか、『子が走り』とでもした方がよいと思う、豆腐屋の鈴を待ち呆けというのは、ある事柄ではあるけれどもそれだけのことしか現わされていない、豆腐屋を呼ぶのに鍋を叩いたのも、鍋を叩くという動作に下品なものを感じさせていけない、その次の句の豆腐屋を呼び戻すのにそこらにある下駄か何かをつかけて表にとび出したその情景がハッキリ表現されているのが佳いと思うのである、大きな声でよんだのか鍋でも叩いたのか、それはこちらで想像してもよいのであって、つかけの鍋という語からくる句の焦点が成功しているのである、鍋を洗わすという句は、ひとり者の朗らかさをハッキリ表現されていて面白いと思う。豆腐

屋さんが冗談を言い乍ら鍋をすすいでいるのまで目に見えるようである。

鍋に飯沢山付けて独り者

S

四畳半鍋は一つでことかかす

S

独身の気随鍋飯相殺し

S

ゆきひらで一人前の飯を炊き

K

独身者鍋一杯につけたまま

雄水

ひとり者の気楽さは鍋に御飯を付けたままであるということはありふれた事柄である、四畳半の句は惜しい、鍋は一つでことかかずという句意に四畳半は狭い乍らも楽しい吾家を意味しないで別の意味の部屋にとれるので弱いところがある、ここではそのもののズバリと「アパートの」としたらどうであらうか、「アパートの鍋は一つでことかかず」となる。鍋飯相殺しの句は独り暮らしの気随気ままな気楽さに引かえて鍋飯のまずさがその気楽さと相殺であるという句意なのだろうと思ったがだれにでも共感が得られるだろうか、句の仕立方も、も一つすっきりしていいと思う、ゆきひらの句も一人前の飯がうれしいのかかないの

かその感じを訴えていない、報告の句にすぎないと言える、鍋一杯につけたままのつけたは付けたでなく漬けたでなければ句としてはうまみがないこんな場合はやはりはつきりした漢字を使わないと句が誤解されるおそれがあると思う。

妻の留守一つの鍋を持て余し

醉升

焦点がもう一つはつきりしていないうらみがある、それは持て余しが煮てあったものが食べ切れないので持て余しているのか、汚れたのを洗うのに油などでコテコテしているで持て余しているのか、そのどちらにでも考えられるのが弱い点である、「妻の留守一つの鍋も洗わない」とすると作意と違うかも知れないが焦点がハッキリしてくるのである。

自動化へ取残されたままの鍋

Y

鍋で炊く飯にもなれて一人住む

H

電気釜美味しくないと鍋で炊き

美哲子

電気には弱い姑が鍋で炊き

城東

鍋が自動化に取残されたと作者は感じたのだがそれだけのことで句は成立しない、その取残された事から深く考えをまとめて作句

する習慣をつんではしいと思う、次の鍋飯になれたという句は報告を余り出していない、そこはかとなき哀愁を句に現わすにはもっと表現に苦心して頂きたい、電気釜の句は弱電メーカから叱られそうな句である、電気釜よりも鍋の飯が美味しいというのは少し変である。飯を炊くだけの特別の鍋があるけれどもその特別の鍋をこの句からは感じとる事が出来ない、次の句は電気には弱いという点に面白さがある、この場合の鍋は美味しくないが仕方がないからという意味があるので句が活きてきているのである。

又祖母が手鍋を提げた頃話

M

新世帯からの手鍋で凸凹で

S

へこみにもうれしい記憶が

鍋にあり

S

どの句にも感激がない、その手鍋を提げた話も聞かされただけでは句のポイントにならない、手鍋のへこみもそれを報告しているだけでは平凡になってしまう、その凹み一つを作った事柄に焦点をしばって句にすることに心掛けるようにしてはしいものである。

そこに鍋あるよとほろ酔に妻起きす

光道

掛けた鍋夫を使いミシン掛

け 蛙水

古句に「添乳して棚に鍋がござりやす」という有名な句があるがその現代感覚の句である、ほろ酔の句には、はかない抵抗を試みる気が感じられるし、ミシン掛けの句には甲斐甲斐しい妻の姿が浮き彫りにされている。

時計まだ帰らず鍋をまたもかけ

雄水

鍋降し駅で夫を待ちわびる

城東

時計まだというのは時計のように正確に帰ってくるだれかのことを詠んだのだろうか、時計だけではそこまで現われていないと思う矢張りこの場合は「主人まだ帰らず」とでもしておく方が共感を呼ぶと思う、駅へ迎えに行くのに鍋をおろして行ったというのは少し誇張があると思うが

この位は良いだろう。ぜんざいにねんごろぶりは鍋で出し

宗義

着想で生きて

いる句である。

掛けた鍋塩こぶ匂い仕立物

蛙水

共感のもてる句である、家庭的な雰囲気を持たせ成功している。

ライスものの宙を飛んでるフライ鍋

八郎

作者が調理場を見て作句したというのだがよく詠まれている、それは「ライスもの」で食堂の調理場が想起されるからである、宙をとんでという見方も面白いといえる。

自在釣の湯気から今日になる囲炉裏

和三郎

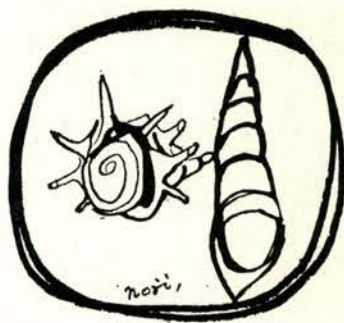
作者は鍋を考えていられたのが鉄瓶でも茶釜でも考えられるのである、この句は課題吟として課題にとらわれると困る句である。(40ページへつづく)

和館 大華文

日本建築の特色に近代美をいかした建物で絵画・彫刻・書道・陶磁・漆工・染織など国宝や重要文化財を集めたすばらしい美術館です。春秋には特別展も開催 (月曜休館) 近鉄学芸館前下車すぐ



唐三彩の写真



口下手

清水白柳選

口下手のデートもつら映画を見 素身郎
 口下手の催促一文もとらず去に 灯竿
 口下手は遂々一口はいらされ 杏花
 口下手も陳情団の数に入れ 曉明
 口下手が口をすべらす程に酔い 愛鳩
 口下手の誠意は膝をちゃんと折り 涼人
 口下手は時間きっちり守って居 圭水
 口下手へ煙草ばかりが減って行き どんたく
 叱るように口下手教え子をはめる 光道
 口下手の癖に憎まれ口たたき 石峰
 口下手の話聞き手の気が疲れ 昌生
 その実は口下手だった聞き上手 生薑
 口下手は小鳥の声が好きで飼い 卯之助

路

集

大関に勝って口下手しやべられされ 満秋
 口下手が職人気質など言われ 同
 口下手へ貸出係ためらわず 三林坊
 肝心のところで口下手怒り出し 秀峰
 サツと来てサツと口下手去んじまい たもつ
 口下手が必死税吏も根気負け 十九平
 口下手な候補原稿までつまり 静水
 手を挙げるだけで口下手役がすみ 井蛙
 口下手が話の壺をおさえつけ 三五島
 口下手のせめても笑くぼ見てもらい 恵二朗
 委任状書いて口下手欠席し 生薑
 口下手がおんなじ話くり返し 代仕男
 真実も言えず口下手疑われ 勝子
 口下手を案じ手に職つけて呉れ 圭井堂
 上役へ口下手誤解されたまま 初甫
 口下手が誘導訊問にひっかかり 晃康
 口下手の幹事にまわるかくし芸 伝一
 口下手の悔み頭を下げてすみ たけお

みんなまで言えず口下手立上り 宗太郎
 口下手が古株でグループ損をする 保夫
 口下手と挨拶断れぬボスト 庸佑
 口下手の誠意死んでから判り 雄声
 実力で来いと口下手譲らない 孝正
 口下手が好きとも言わず手を握り 周甫
 口下手がいつも貧乏くじを引き 井蛙
 口下手を好きで嫁いで物足らず あいき
 相談の隅に口下手鼻毛抜き 光郎
 口下手と察してマイクを次へ向け 灯竿
 口下手の使いへこま書いてやり 宗義
 口下手がプラス収入役の椅子 九呂平
 口下手の道を聞くさえひまが要り ひ呂し
 口下手の夫の語尾をひったくり 和三郎

佳

口下手がお世辞を言って赤くなり 寿美司
 弁解もせず口下手笑ったとき 代仕男
 きっかけを外し口下手茶で帰り 蛙水
 口下手が掛合に来る急な用 淀月
 アリバイがあるに口下手疑われ 檀雄
 口下手をからかうようなインタビュ 宗太郎
 美人が加わって口下手なおトナリ むじな
 御主人は口下手だと大思い 恵二朗
 口下手でかてて加えて筆不精 生薑
 お悔みのつづきを妻がすてくれ 藤波

人

口下手をとらえて根はり葉はり聞き 周甫
 口下手も黙って居らぬ出す話 藤波

地

天

善意

後藤梅志選

席ゆるる善意へ当り前のよう 石峰
 棺覆て親の善意がやと知れ 野迷路
 之も善意が女マツチをすつてくれ 進之助
 表彰をされて善意が表に出 秀峰
 何んと言われようが賑に花を届け 圭井堂
 寒空に善意でふえる社会銅 庸佑
 未亡人素直に善意うけとれず 宗太郎
 子の善意父親少し足してやり 蛙水
 貸す方が借る身になっている善意 千翁

✓
 税務署へ口下手証明書をそろえ 可住

品質優良
タチカワペン
 TACHIKAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画紙
 立川ペン先株式会社
 大田市東区常盤町一丁目十一番地

陰にも善意にとつて丸く生き 初甫

親切をしてはにかんだ子の善意 勝子

よい子等の善意が朝の駅を掃き 井蛙

模造でも彼が善意の送りもの 秀子

茶柱が朝の善意をかきたてる 和三郎

人の善意素直に受ける年となり 旋鳳

贈物を善意と見過ぎこの始末 専翁

せめてもの善意見舞にかけつける 圭水

トップ記事たまに善意にゆずりたし 凉人

裏切られながら善意をまた信じ たけお

片隅の記事に善意が殺到し 照子

匿名の善意を恐るおそる受け 藤波

暮の金善意の人に拾われる 愛鳩

うち足りた暮し善意の押し売りし むじな

善意ではなかった算盤はじいてた 睦明

真実は強し善意の目がきれい 恵二朗

贈賄といわれ善意も浮ばれず 三五島

女への善意誤解をまねきそう 卯之助

だまされても善意は光失わず 生薑

善意にも程があるわと妻むくれ 雄声

善意小さくとも心の隅にはけみとし 孝風

佳

はんのりと記事に匂うている善意 三林坊

花主はおさげであった駐在所 八九寸

善意ある教師としての轍きびし 千翁

旅役者ある日善意の人に逢い 凉人

ぼろくそに言う口裏に見る善意 どんたく

和解してみれば善意のこもる人 王石

善意には取らず劣等感おこし 隆子

人

度の過ぎた善意施設の子を企め 十九平

地

寺持つてぶたれた善意よくわかり 句楽坊

天

雪降れば雪に籠りて人善意 光道

軸

返信の切手がそえてある善意

腕組み

小浜牧人選

腕組んで来たフレンドにマアあわて 石峰

腕組みの前へ借金取りがくる 満秋

腕組んだままアイデアは浮ばない 同

腕組んだ二人にネオン明るすぎ 桂仙

金詰りいつか腕組む癖がつき 孝正

ボスの子は小さい腕を組んでおり 向水

四面楚歌の中を女と腕組んで 光道

定年が見えて腕組む日の多く どんたく

腕組みしていてボスは恐迫し 専翁

腕組みをして定年の日向ほこ 静波

腕組んで風邪引ききらいもて余し 圭水

腕組みのうらにも約手の日が迫る 同

腕組んだ医者へ不安な顔が寄り 凉人

腕組んでザル基同士がにらみ合い たけお

腕組みの社長へ団交喰い下り 樽雄

腕組めば組めばファイトの出る若さ 進之助

腕組みをして凡人に金のこと 三林坊

思案いま二つに割れて腕を組み 秀峰

腕組みをすれば生意気さに見え 雪美

美術館ピカソの前で腕を組み 十九平

腕組みの男へ鳩の糞が落ち 同

腕組んで時代のズレを嘆息す 圭井堂

腕組みの前へおそろおそろ出る 保夫

溜息をつく腕組みを子のがのぞき 宗太郎

ダカンの虚勢が無理に腕を組み 千翁

腕組みへ妻は番茶を汲み直し 同

チビラの妻みを利かす腕を組み 代仕男

黒帯を貰った腕を組んでみる 瑞歩

腕組んだまま信念を押し通す 静水

腕を組む手形へ時計甲高い 和三郎

腕組みを少しはしらう母を連れ 淀月

無心さて切り出し腕を組み 睦明

スト受結腕組みを解く朝になり 藤波

腕組みをしている方が金を持ち 灯竿

腕組みがもとの思案へまたもどり 旭峯

腕組んで権利を守るピケライン 王石

旅はよし妻と腕組みして歩き 恵二朗

スクラムを組めば教師も俗になり 雄声

腕組んで歩く若さをけなるがり 宗義

蚊一匹たたいて元の腕を組み 同

腕組みをしても無い智恵わいてこぞ 古心

腕組みへ嫌な相談持ちこまれ 卯之助

佳

腕組みで最高級の技師でいる 可住

腕組んでやろうと男同士なり 昌隆

腕組みを解かす明るい妻の笑 隆子

腕組んで男らしさを見せており 初甫

労働歌生きねばならぬ腕を組み 井蛙

腕組んで若さは恋を憚らず 八九寸

腕組んでおれば恐妻とも見えず 光郎

その中に親分らしい腕を組み 睦明

腕組みのようやく小さい鯉のぼり 淀月

腕組みへ百円札も降ってこず 愛鳩

腕組みをして鉄骨と対峙する どんたく

腕組んではやる闘志をおさえてい 軸

色紙短冊

書画用品

大坂戎兵

丹月堂

を申せニニ



柳一界一展一望

句会

▼本社五月句会は十日(金)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。都心へ新緑の爽やかな詩心を持ちより、柳友お誘い合せの上多数のご出席をお願いする。

▼南区医師会文化部杏林川柳句会(大阪市)は四月二十三日(火)

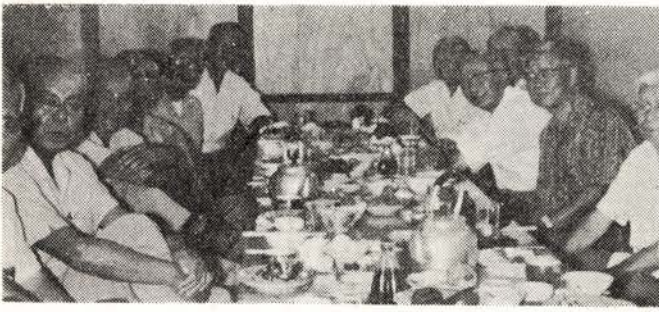
午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)は四月十八日(水)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)は四月十九日(金)午後五時半からコクヨ株式会社社会議室で開催。▼大阪通信病院川柳会四月句会は二十七日(土)午後一時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼川維岡山支部三月句会は十六日(土)岡鉄クラブで開催。

▼川維篠山支部四月句会は二十日午後一時から篠山城跡で開催。▼並木会川柳会(笠岡市)は服部十九平氏を囲む句会を開催。▼丸紅飯田川柳会(大阪市)は三月二十四日観心寺へ吟行、河内長野市の鍋溪温泉油屋で句会を開催した。

▼富柳会(富田林市)は四月七日午後一時から汐の宮汐の井温泉で大阪府教育委員会賞受賞記念祝賀句会を開催、川柳部門の初めての受賞を盛大に自祝した。▼第十四回新潟県下川柳大会は六月九日(日)午前十時から新津市本町一、新森亭で開催。雑詠を紫痴郎、朝太郎、呑風、咲哉、夢之助、涼秋、風柳の七選者別個に二句宛。(同一句の投句を禁ず。)投句は五月三十一日まで、に百円(記念品進呈)同封の上新潟県新津市駅前柳都川柳社宛。▼第十七回長野県川柳大会は五月十二日(日)午前十時から小諸市駅前通り原田別館で開催。▼噴煙社陽春川柳大会は四月七日(日)午前十時から富国生命熊本本社講堂で開催。▼春の東北川柳大会は五月五日午前十時から米沢市役所前厚生会館で開催。▼第二十七回京浜川柳大会は四月二十九日午前十一時から横浜市の神奈川県立勤労会館三階で開催。▼第九回エヒメ川柳研究大会(愛媛県)は五月十九日午前十時から今治市中央公民館

で開催される。兼題、ひと昔、月明り、ハナドル、緑、やじ馬、吹く、痛む、各題三句。▼川柳こなゆき十五周年記念大会は昭和三十一年八月十一日(日)正午から小樽市公会堂で開催。兼題、北海道・助ける・答・廻る・緑・転い・余る・遠い・だしぬけ・愉快・各題三句、投句は百円封入の上六

快夢起敬送会——沖縄及び日本内地へ新立つタイロ社・川維ハワイ支部長山快夢起氏の敬送会が三月二日「りんご」で開催された。写真説明1面つて左から筆主・竜花殿・祥山・柳葉・果木・万里歩、向つて右から渡人・快夢起・北海・十四・平八郎・写真提供あき坊の諸氏・磯舟殿影。



月三十日まで小樽市末広町六流

川登魚方大会吟整理部宛。▼江戸川(東京都)四月句会二十八日は二十八日(日)午後一時から上・色天祖神社内上一色会館で開催。▼観光川柳創刊百号記念全国

橘高薫風子著 麻生路郎序
川柳集
有情
定價二百五十円 送費六〇円
▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入つて採まれ、川維編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

発行所 川柳雑誌社

柳人誌上競吟大会は兼題、百一〇番・百発百中・百合・百面相・百科辞典・百戦練磨・百も承知・百鬼夜行・百葉の長・百円札、投句は各題三句を明記の上六月十五日までに東京都港区芝新橋六〇六六伊藤路天宛。会費百円。▼現代川柳作家連盟第七回総会は五月三日午前十時から神戸市生田区下山手通四丁目兵庫県労使センターで開催。▼川維米子支部松露百号記念川柳大会は五月十二日(日)午前十時から米子市哲生温泉友恭寮で開催。兼題、百(尼緑之助選)、多敷決(青砥可明選)、途中(大西八歩選)、続く(木村三雷波選)、推理(河村日満選)、逆効果(藤井明朗選)、痛い(奥谷弘朗選)、投句は五月十日までに十円切手五枚同封の上、縦十五欄、横三欄の白箋に一句ずつ明記裏面に雅号を記し米子市富士見町一三五小西雄々宛。▼川維阿倍野五月句会(大阪市)は箕面吟行、十九日(日)午前十時阪急梅田西側に

招待されて西下、二十三、四日に

消 息

▼丸尾潮花氏(高槻市)は四月二日定年旅行で玉造温泉へ清遊、松江、哲生温泉等山陰各地を巡遊された。「桜まだかたく湯の香を抱いている」▼林野睦光氏(呉市)はベッド販売会社の新しい職場で多忙な毎日を送っている。▼阿部佐保蘭氏(東京都)は四月二十日、豊岡市の親戚の結婚式に招待されて西下、二十三、四日に

不朽洞の人々



氏夫忠小西の勤務工場後教員

厄年を契機に飛躍したい夢

雄々

今年は四十二才の厄年をむかえ、家人のすすめで出雲大社で厄払いしてもらった。最初はそんなことまでしなくても、と、反対したが、気分は若いつもりでも、万一のことがあつては困るし、精神的にも安心できれば……と、重い腰をあげたわけであるが、こういうところに人間の弱さがあるかもしれない。

不朽洞訪問の予定。▼小浜牧人氏（神戸市）は春退院の予定を医師のすすめにより延期し、引続き療養されることになったので、先生から療養中は作句に打ち込めとお諭しを常に掛けて精進するつもりです。▼本多清人氏（大阪市）は布施市に新居を建築中であり五月中旬完成予定とのこと、又、四月七日には会社の慰安旅行で桜爛漫の一日を楽しみました。「分譲地一歩歩いて又思案」▼杉本一鶴氏（貝塚市）は三月十七日の不朽洞会総会出席後、自宅に泊、家族との四方山話と一馳走攻めに療養生活の淋しさを一挙に吹飛ばし生きている感激を味わわれた。▼木山遠二氏（笠岡市）は持病の胃以外は元気で居られるが、畑へ出ても丁度ひきがえるのようじつと空を見ている時間が多い始末だが、これはやはり年令のせいでしょう。▼米沢晴明氏（大洲市）は今回大洲市立喜多小学校

長に栄転された。同校は四十年前に氏が学童として卒業した母校なので感慨無量だったとのこと。この学校は児童数が大洲市第一で一〇五八人在学しているそうだから教育も大変であろう。「思い出はいいな故郷の山と水」の句、を寄せられた。▼八木肇太郎氏（堺市）の指導されている富柳会（富田林市）は三月三十日、大阪府教育委員会から社会教育小集会の優秀団体として表彰された。同会は昨年十一月にも富田林市教育委員会から表彰されている。▼川村好郎氏（大阪府）山本立見氏（大阪府）らは三月二十四日観心寺へ吟行、それぞれ、「霜に耐え綻ぶ梅に教えられ」「梅も古りお寺も古りて観心寺」の句信を寄せられた。▼麻生アト氏（奈良県）は四月一日発行のC・M・C第三号に「幼児音楽教育へのメッセー」と題する小文を掲載された。

▼戸倉普天氏（兵庫県）は元気で暮らしたそう、前後八カ年を費されて郷土誌「沼貫村誌」を最近脱稿、目下その補遺を執筆されているらしい。元村長の人念な執筆だけに最良の村誌が生まれることと出版の日を期待している。氏の令息仁一郎氏は工博で東北大学部教授をされている。▼工藤甲吉氏（青森市）から「青森もやっ」と春が来て桜もあと十日に迫り十和田湖へのバスも開通いたしました。」と。

句集

▼川上三太郎著句集「孤独地蔵」が近々発刊される。B5判五〇〇頁、豪華本、収録句三千句、送料共二千五百円、申込みは東京都中野区川添町二九川柳研究社振替東京九四〇四六番。

▼高津徹也氏（堺市）は三月二十七日、近畿電信電話会館で木工久子さんと結婚、華燭の典を挙げられた。お慶び申上げる。▼市場段食子氏（大阪市）の令嬢が三月二十三日天王殿で結婚の式を挙げられた。お慶び申上げる。

電話開通

▼金井文秋氏（大阪市）の宅に電話が開通した。（七一七）五九四六番。

転居

▼高津徹也氏（堺市）は堺市浜寺石津中町三ノ四四六へ転居。▼添田星人氏（仙台南市）は仙台南小泉字中倉二ノ一郵政宿舍A3の6へ転居。

正誤

▼前号三十六頁一段五行目「阿蘇鈍く」の句、同じく三段四行目「寒々と」の句主桂山とあるは桂仙の誤りに付訂正。▼同八頁下段最終行「冬の部屋」とあるは「灸の部屋」の誤りに付訂正。（薫）

不朽洞

会から

楼上で開催。

一、路郎師夫妻金婚祝賀記念事業実行委員会選任の件。
一、常任理事会の幹事選任の件。
一、その他の件。

を協議同席上で左記の三氏が幹事に選任された。

金井文秋、西田柳宏子、橋高薫

風子

出席者、路郎師、生々庵、栗、いわを、静馬、文秋、柳宏子、薫風子、多久志の諸氏。

☆常任理事会は四月七日（日）午後九時から自安寺で本社句会終了後開催。

一、川柳まつりの件。
一、その他の件。

を協議、午後九時四十五分散会。出席者は路郎師、生々庵、好郎、いわを、文蝶、水客、静馬、梅里、柳宏子、文秋、小松園、薫風子、多久志の諸氏。

☆常任理事会は四月十八日（木）午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。

一、川柳まつりの件
一、その他の件

を協議午後九時過ぎ散会した。出席者、路郎師、生々庵、好郎、いわを、文蝶、水客、静馬、梅里、柳宏子、文秋、小松園、薫風子、多久志の諸氏。

☆新会員紹介

田中敏行（大阪市）正一 春雄氏推薦

伊集院良（大阪市）正一 梅里氏推薦

☆退会一松村万古氏（倉敷市）逸見灯竿氏（岡山市）は共に家事の都合で三月限り退会された（多）

☆常任理事会は四月一日（月）午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院

金 泥 集

麻 生 葭 乃 選

「待遇」

待遇に不足ないのもストライキ 阿 茶
 待遇ががらり変った心附け 同
 待遇へさすが雲水ストをせず 同
 待遇が良すぎ案じる秘書の母 同
 結構すぎてお情けの牢のよう 同
 待遇の要求義務は忘れがち 同
 子を連れて住込む窓のすき間風 きさ子
 待遇はどうでも見込みある職場 同
 待遇のことには触れぬ子の便り 同
 待遇は悪いが富士の見える部屋 同
 待遇ひとつでいつでも寝返る気 同
 気楽さははつとらかしいう待遇 清 子
 人を釣る餌の感じの「優遇す」 同

待遇が良すぎて窮屈さを感じ 同
 待遇にこだわらずわが道を行く 同
 この猫待遇よいのかよう 肥えて 同
 嫁の座の待遇改善いつのこと 美 喜
 人手不足優遇しますも寄って来ず 同
 待遇のよすぎる話で恐くなり 同
 肉身の会社で冷遇されており 同
 生意気な待遇次第と中学生 一 栄
 待遇へ何かあるなどかを繰り 同
 待遇を言わず給料の額に触れ 同
 待遇がよいと思えばあまい屋 周 甫
 置物にする待遇が気に入らず 同
 待遇の不満も忍んだなさぬ仲 同
 待遇をとやかく言うて失職中 春 栄
 待遇に左右されている求人欄 同

次回題

「運勢」

切 五月末日

発表 七月号の予定
 宛先 大阪府南河内郡美原町丹
 上四〇四 清水白柳宛

(35ページから)

鍋の大きさとト伝を憶
 い 真 奇

大鍋のいと無雑作に扱われ

H

こんな鍋どんな料理に使う
 のか S

塚原ト伝の鍋煮試合は講談にあ
 ったがこの句の境地は浅い、ふと
 想いというだけの句である、無雑
 作に扱われの句もそれだけのこと
 で何故無雑作に扱われているのか
 わからない。次の句どんな料理に
 使うのかと作者が読む者にたずね
 ているような表現ではない、
 作者がその鍋を見ての驚きが句に

出ていないのである、こんな鍋で
 は作者だけしかわかっていないの
 でもっと表現に苦勞してほしいと
 思う。

あつと言う間に鍋からにな
 る子沢山 兼治郎

食欲へ鍋は残せとふざけ口
 柳瓢子

匙の音鍋の最後を傾ける
 和三郎

鍋せせりやたらにケチをつ
 けたがり 醉 升

子沢山の句はやや平淡である、
 そして鍋からになるの、からは空
 らとする方がよい、ふざけ口の句
 はこのふざけ口という語句に句品

がないのは惜しいと思う、匙の音
 の句は鍋の最後という語句が生き
 ていて成功している句である、次
 の鍋せせりという上五文字に何か
 抵抗を感じたがこのままでもよい
 かと思った。

われ鍋にとじ蓋を詠んだ句もあ
 ったが取上げられなかった、チャ
 ンコ鍋の句も十句程あつたがこの
 一句だけを取上げた
 入幕も近くあぐらのちゃん
 二鍋 隆 史

あとの句はどれもチャンコ鍋を
 説明しているような句ばかりであ
 った。
 鍋を鉄かぶとにしたという句
 や、雨漏りを鍋で受けたという
 句、断水で鍋まで水を張ったとい
 う着想もあつた、多かったのはす
 き焼鍋の句であつたがよいと思っ
 たのを次に並べてみるから参考に
 してほしいと思う。

たまさかのすき焼鍋の錆を
 とり 静 水
 あつちこつちの鍋へ幹事は
 気を使い 兼治郎
 倦怠期すき焼鍋もいつか錆
 びてつとは言わずちり鍋と言
 うておき 光 道
 八郎
 降ろしても土鍋ぶつぶつま
 だばやき 保 夫

最後の句はまだばやきという処
 に面白さを感じたのである。
 山くずれ泥から鍋が顔を出
 し 句案坊
 この句は着想の広さを頂いた。
 串くれとロレッツあやししく鍋
 を指し 真 砂
 この句にも着想の広さはあるが
 やや浅い。

残業にはずむ鍋焼き虫押さ
 え 繁太郎
 下五の虫押さえを作者が面白い
 と思っておられるのだがそれが生
 かされていない。
 鍋飯に苦情も言えず共稼ぎ
 苦情も言えずという処に共稼ぎ
 の悲哀があらわされているよう
 である。

同 甫

つまらないお好み内の鍋で
 出来 静 水

小市民的な家庭の雰囲気をよく
 とらえて作句されているのがよか
 ったと思う。
 使わない鍋は届かぬとこに
 伏せ 白 柳

旧作で申訳けないが御ゆるしを
 願っておく。

次回研究題「ナイター」五句以内

切 五月二十日

発表 七月号の予定

宛先 大阪府南河内郡美原町丹

上四〇四 清水白柳宛



投稿規定
▼用紙は原簿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 四月句会 (大阪市)

4月7日 午後6時
会場——千日前自安寺

花の四月の第一日曜日が句会日だけにその出足が気づかれた。が、熱心な柳友がぞくぞく明かるい顔を見せてくださったので句会部もホッとした。会場は七分咲きだが句会部は満開というところ。京都から毎月出席される西村句楽坊氏には、愛嬢秀子さんがいつも付き添って、美しい孝養の花がここにも満開である。

黙平翁も九十才までは出席できると、若い者は顔色なしである。

今月の柳話は中島生々庵副主幹である「なぜ、暖くなるか」という陽春四月句会にふさわしいテーマを上げて登壇された。さすがは柳人医博だけに正に「きょうのききもの」だった。(本誌・睡眠の話・参照)

今月の不朽洞貫は路郎主幹によって東天紅氏の句に輝やいた。九時閉会。

(F)

出席者——路郎、黙平、行人、真砂、多
久志、東天紅、専翁、圭井堂、文秋、白
柳、一栄、柳志、舟遊、静馬、美称子、
市郎、梅里、秀子、柳宏子、水京、武雄、
一三夫、雄声、満秋、みさ子、文蝶、句
楽坊、生々庵、あいき、八郎、旅風、す
む、阿茶、恒明、小松園、庸佑、梅
志、好郎、水客、清子、いわを、薫風
子、季費、宏子、腹力

兼題「一芸」 麻生路郎選

風雪に耐えて一芸に名を残す 高志
一芸を出して帰りは御前様 隆子
先生も一芸あって押し出され 寿美司
一芸ですって終うて文化財 野迷路
顔見れば名人芸と思われず 喜仙
一芸を持ち辛うじて世渡りし 同
一芸に秀で学校にも行けず 満秋
一芸の仕上がらぬまま迎えた日 八九寸
一芸に生き抜く楽屋のすき間風 宗義
くさされるひとつ覚えが板につき 千翁
一芸の奇蹟は死期を盛り返えし 生薑
一芸を守って老優強く生き 城東
一芸に老いて人間文化財 どんたく
一芸に秀いで縁談に遠くいる あいき
一芸に秀いでて今は守衛なり 多久志
うぬぼれの一芸アロは見向させず 文秋
またあれか一つ覚えの阿波踊り 梅里
一芸のなかに飲むのも入れておく 水客
長唄があるばかりに嫁さく 柳志
平でいて一芸だけは認められ 東天紅
生きるためにする一芸の峻しき 柳宏子

兼題「合格」 正本水客選

一芸の足しに子昂の字も習い 梅志
ステージに立っただけで客笑わせる 水京
一芸がパチンコだけのお人善し 生々庵
出る幕がない一芸の先ん越され 梅里
一芸があつて宴会よう酔わず 柳志
七難をかくす短大生田流 同
一芸がとうとう香具師に成る 圭井堂
一芸は言わずこつこつ平社員 文蝶
左利きだけが一芸とはかなし 一三夫
一芸を守り社会の隅で住み 行人
一芸を夫におしえるためならい 舟遊
身がもてぬ程一芸が産を積み 一十
芸の鬼励ます妻の手内職 文秋
一芸に達してからの人の巾すむ 静馬
一芸にひいてて世事にうとなり みさ子
一芸を出し合い今夜左遷去る 梅志
一芸は昔話となりけり いわを
大人はいいなあ一芸で生きられる 雄声

兼題「靴べら」 後藤梅志選

運転免許まだ妻には内緒にし 判志
ノートにかりてた子が合格し みさ子
合格の証紙ベタ貼って本場繰 清子
合格という角帽のきこちなさ 梅里
別宅のほうのこどもは合格し 静馬
合格を下から読んでゆく弱気 旅風
合格へ握手されてる郵便屋 どんたく
入試パスとたんに神様はつとれ 一三夫
合格のうれしさ廊下見てまわり 梅志
補欠でも合格祝は派手にやり 柳宏子
これくらいなら合格と票を入れ 文秋
合格の通知の文字はなぐり書き 季費
合格のよろこびと来る花便り 梅里
合格の靴好きな道帰ってき 水客

つまさきでたつて靴べらがして居 寿美司
抱いた子に靴べら持たせおくる朝 宗義
肥えてきて靴べら要らぬ靴に替え 高志
靴べらに哀感可も不可も退職 生薑
六十路こえ長き靴べら有難く 美称子
靴べらへ子供がさがむ土産物 清人
酔うた手へ長い靴べら渡される 梅里
靴べらと鍵せめてのマスコット 専翁
披せかけて出す靴べらはいとお客 黙平
靴べらもアクセサリーになる玄関 苦菜坊
靴べらを心得顔に差し出す児 旅風
指先ではいて靴べら寝すせり 舟遊
また来てと靴べら抱いて送り出し 圭井堂
ポケットから南京豆と靴べらと 梅里
酔いさめのポケット靴べらだけ残り 好郎
靴べらで足がついたと知らぬなり 庸佑

共かせぎ又靴ペラがかわって居 柳志
靴ペラに何の思想もない男 水客
靴ペラもチップのきいた渡し 阿茶
靴ペラをもつて話をむしかえし 柳志
平凡な日々靴ペラが知っている 文秋
靴ペラの手元が狂う二日酔い 一三夫
靴ペラに泣き出しそうな布袋腹 生々庵
栓ぬきのついた靴ペラ貸してくれ 梅里
靴ペラを持った仲居の手を握り 文蝶
落してもいい靴ペラを賣うておき 多久志
定年へ今日一日の靴すべり 宏子
朝の靴ペラ妻の郵便たのまれる 舟遊
靴ペラも子に初めての革の靴 すゝむ
靴ペラ無用と往診つかける 東天紅
長い靴ペラ子供に出され二つも 梅志

兼題「客足」 河相すゝむ選

客足へ彼岸の花の値が上り 高志
客足のあった割に売れもせず 行人
店員が目立ち客足とぎれたり 舟遊
客足の数に万引はいって 静馬
独身と知って客足つきはじめ 柳志
埃だけ残し客足通り過ぎ 静馬
客足がふえりやふえり貸しが出来 一三夫
もノレンだけでは客足ついて来ず 柳宏子
客足は絶えたはマダム更年期 生々庵
客足をとめるネオンへ宵の雨 梅里
客足のまばらになって売られ 句念坊
客足が絶えておでん屋水を差し 好郎
たて込んでくると常連隅へやり 梅里
ダンピングしても客足減るばかり 多久志
客筋をはこり客足足にして 生薑

八百長もまじく客足派手に見せ 生々庵
ウインドへ客足とめただけのこと 好郎
ミナミまで来て客足について行き 白柳
客足の遠のいた頃歯が痛み 水客
客足を得つ盛塩の白き宵 清子
客足も途絶えチャルメラの音が寂し 多久志
客足で名作やと認められ 野迷路
客足をにらんで税吏聞き入れず 生々庵
客足の途切れたとこで飯にする 行人
客足へ一つ叩いて一つ負け 東天紅
夜泣きそば客足絶えたと呼び 旅風
客足を花にとられた繁華街 行人
物思いして客足によろけたり 白柳
客絶えて辻に人符顔のホス 黙平
客足をにぶらせあつき晴れた空 清子
客足が映画へ向う空模様 雄声
客足を占うハート7と出る 梅里
客足へ美人を一人スカウトし 満秋
客足をヒタリと止めた救急車 梅里
団体の速度に客足なってくる 水客
客足の絶えて故郷の母想う あいき
客足が遠のきBG続き読み 句念坊
客足をふたつに分けた花ぐもり 旅風
客足の方で慣れてる私鉄スト すゝむ

席題「ゲテモノ」川村好郎選

ゲテモノの方が立派な箱に入れ 小松園
つぎつぎとくちゲテモノに胃もあきれ 庸佑
そもそもはゲテモノ人間牛を食う すゝむ
ゲテモノを漁り春宵悔いていず 圭井堂
ゲテモノのはめるコツなど教えとき 梅里
ゲテモノを学者にみせて嬉しがり いわを

心得た顔でゲテモノ見て回り 柳志
ゲテモノのような旦那にきつつかえ 満秋
ゲテモノの値踏み一と桁高つけ 梅里
女房にゲテモノ買いを封じられ 多久志
ゲテモノ食いあんな男も食いつぶし 東天紅
ゲテモノの箱を仰山そうに開け 小松園
だまされたおもつてとゲテモノたべさせ 恒明
悪妻をゲテモノ好きのせいにされ 生々庵
ゲテモノにされて仏像浮かばれず 梅里
恐わごわに食べたゲテモノ自慢する すゝむ
ゲテモノ好きに奥さんがきれいすぎ あいき
色欲の罰かゲテモノに熱を入れ 好郎

席題「熱」 山川阿茶選

春爛漫微熱下らず妻若し 多久志
熱入れすぎて赤と間違われ 雄声
熱いれてみたが人妻だとわかり 多久志
その熱に頑固な父もおれて出る 庸佑
熱弁でした公約を反古にする 梅里
情熱が仕事の鬼と恐れられ 柳宏子
情熱に負けて進学承知する 圭井堂
熱冷めぬうち仲人はまとめる気 文蝶
微熱のあるとこを数医にとりつかれ 生々庵
掘出物らしい熱のあるお弟子 梅志
賞められて熱上げて来た女弟子 黙平
乳頭に赤ちゃんの熱おしえられ あいき
熱冷めてみれば彼女も只の人 圭井堂
熱烈な恋を一生にしてみたし 一栄
拍手からだんだん熱の入る話題 文秋
平熱の舌でおかゆの味を賞め 柳志
熱心さはめて不器用とは言わず 生々庵
二十貫も有つて大げさな熱 市郎

38年度全出席者(四月現在)
路郎・八郎・庸佑・薫風子・すゝむ・白柳・柳志・一三夫・水京・水客・行人・秀子・いわを・季費・専翁・舟遊・みさ子・圭井堂・静馬・多久志・生々庵・柳宏子・文秋・梅里・阿茶・宏子・葦乃

天位受賞者

③水客・雄声②好郎・梅里・旅風①すゝむ・竹莊・生々庵・恒明・南宗・水京・一舟・夢虹・圭井堂・大丘子・静馬・みさ子・紫香・東天紅・あいき

不朽洞賞杯受賞者

旅風・水京・どんたく・東天紅

熱醒めた訳は融通が止まりかけ 黙平
ブラばかり目立つほどにも熱が冷め 一三夫
熱さめてやっとな自分を取戻し 静馬
アスピリンで女の熱のさがらない 舟遊
やんちゃしてる方がよかつた九度三分 梅里
熱さめて恋の不思議に吐息する すゝむ
熱のない返事は雨戸開けてから 水客
熱さめてふたりはもとの他人なり 庸佑
平熱になると水枕のやり場 黙平
熱あるとスタンドさせの金くれの 好郎
君知るや男が熱涙こぼすとき 一三夫
別居した妻から余熱のあるたより あいき
知恵熱へ母は着たまま横になり 舟遊
情熱がさめて無口の日々になり あいき
熱すこしある日に届く花だより 旅風

握手して男の熱は黙々とく 水客
熱下りみだれた髪が気にかかり 阿茶
野球熱一村あげて船で来る 同

席題「スト」 傍島静馬選

折角のデートをストに邪魔をされ 梅里
トラックを跨げる事もスト馴れて 黙平
ストをする気持判らなくないけれど 八郎
スト解除もくちやにされ詰まされ 梅里
私鉄ストこれ見よがしの自家用車 水京
ストの日のトラック荷物並に乗せ 市郎
スト決行昼の日のテレビ見る 恒明
ハンスを最も簡単に反抗期 八郎
婚礼の時間にストが気にかかり いわを
スト口実にして約束すっぱかし 梅里
駅長が切符をきってくれるスト 満秋
お父さんの鉢巻姿見て通り 小松園
ストもせず母は一番働き手 清子
スト解除でつせとすしを巻直し 柳志
スト出来ぬ自分にストが羨まれ 文秋
ストもなく平穩無事な町工場 清子
きらつてたストに吾子も交るなり 同
スト様々おいらは流しの運転手 恒明
国電の近くでストのピンとこず 舟遊
スト決行中気の無い顔で見て通り 小松園
又かいなとスト馴れしてしまい 多久志
ストの日のレール静かに伸びている 満秋
ご協力どころか勝手にやつたスト 圭井堂
ストライキ社長有馬の温泉につかり 雄声
ストやらぬ幹部も月給上つてた 静馬

川維 玉造支部句会 (大阪府)

西出一栄報

十周年記念大会

リバイバル節もよまた祖母うたう 美祚子
斗病の窓へ木の芽が顔を出し 一栄
冬の間に充分用意した新芽 章子
木の芽だち目ばちもなになにに 城東
雪解けに晴衣気になる里帰り 政子
雪解けへスキーの足がまだ痛み 珠笑
雪解けを待つ雑草に我似たり 一舟
豪雪が済めば雪解け又案じ 柳宏子
雪解けに式をあげます春近し 水京
式よりもお産の準備先になり 八郎
挨拶へ心の準備して出かけ 白柳
下車準備荷物の数をよんでおき 寿美司
ぬけあそび寝しなに切戸あけておく 風仙洞
いろいろの夢を描いて産衣縫う 喜久堂
心ととのえて求愛の言葉待ち あいき
横槍が準備万端狂わせ 清子
準備したご馳走猫に試食され 豊子
挿花展花瓶にまでも前衛派 堀水
牛乳の瓶で一輪咲く飯場 珠笑
灯が明るく花瓶の花も佳き日柄 六竜子
似た顔に子と愛情がうすくわく 義介
無理言うてみて愛情をたしかめる 竹莊
六十年の不作といったって仲よし 天真
世の善意施設へ愛の灯がともる 春念
愛すると言うてしまえばしららし 宏子
家柄を言うて愛情無視される 清子
飯に似た愛情があり添いとげる 文秋
落ちたのかそうかと 言っただけの父 路郎
筆塚に遊ぶ子天神 サン平和 眉水
天神さんでつせと留守番だけの店 珠笑

川維 阿倍野支部句会 (大阪府)

金井文秋報

生きておりますと蛙も座りかえ 柳志
ランデブー蛙の方が声を呑み あいき
うららかな青空キリン背のびする 良
事務をとる尻落ちつちかぬうらかさ 文秋
うららかな陽へ五重の塔のつと立ち 文蝶
金と暇をろうて春のうららかさ 文翁
入学の苦勞も済めば春うらら 專翁
煙突の煙も活気ある社運 卯三
活気あるうちは銀行貸してくれ 恒明
一合で活気付いたか踊り出し 静馬
開店の活気に客もつり込まれ 狂二
スタミナも消えて心も円くなり 圭井堂
スタミナも消えて心も円くなり 双葉
スタミナの衰え酒が減つてきた 柳宏子
冬山へ青春のスタミナがつつける 宗義
スタミナのは後に控ゆる口があり 生薑
スタミナは後に控ゆる口があり 喜仙
あのとしてあんなのうけをよくもあ 但馬
ぬけぬけのうけて飲んで食うて去に 梅里
里帰りはなしは夫の事ばかり 八郎
反対は遠い親せきから届き 柳志

ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

好きな娘の嘘と知りつたまされ 紅茶
大臣の嘘が電波に乗ってくる 拝山
ことここにどちらの嘘の恋なりき 峯園
意識して綺麗な嘘を褒めておき 内海

嘘一つカバーする気で又一つ カロ女
娘をさすと母方便の嘘もまぜ 泉水
取帰には嘘もつけない良い夫 静紀
すれすれのところ嘘にならず済み 須磨子
方便という説教嘘もまぜ 紅溪
二次会が重なり妻へ嘘も言い あき坊
嘘だとは思えぬ嘘を聞いてやり 平八郎
沈黙の眼鏡に嘘を見抜かれる 笑有
話手の上手な嘘につり込まれ 美潮
迂闊にも喋りつづけて嘘がばれ 晩舟
勿体をつけて易者は嘘もまぜ 柳葉
嘘七分誠三分の女将なり 万里歩
嘘ついて出た夜のネオン明るすぎ 魔花麗
姥桜娘に嘘のなりを見る 浅太
嘘ついて儲ける電話かけている 快夢起

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

姉さんの艶聞少年の清潔感にふれ 尚平
濡れぎぬの艶聞それが縁となり 生薑
母に言うまい父に女がある話 鳥雀
艶聞のふたりへ窓の私語が追う 和三郎
マナイトがある日大胆になれという 幸男
大胆な男女の子ばかりうませ ゆきら
その大胆さがヒールの高さにある あきら
掌に磁石のせ瘦せて行く 紫蘭
山気あるだけ如才のない男 句楽
取戻す山気は損を大きくし 親生
歩いて五分という住宅地にひかり 禎一
口許に微笑浮べている山気 三光
鳴咽の中に乳母車が忘れられて 礫

意外とは妻の鳴咽を聞く日なり 紅 寿
波がしら鳴咽の足跡消してゆき 如 州
鳴咽の部屋の色 彩 がない 豊 次
土愛す力にいどむ 基地の 柵 晏 子
自衛隊救援基地になる 平和 王 石
飛行基地 ざーんと向うから 人 来る 外 人 司 郎

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

踏切であつた視線を汽車が分け 三 平
おねだりがさうは出来そな べの 顔 つる 平
黙舌梅顔を変えさす証 堀 が 出 佐 加 恵
彼岸には帰るとだけに母は泣き 天 竜
寺不如意彼岸回りもこまごまと ごろう
お彼岸と盆は姑にまかしとき 美 舟
彼岸入り僧の親子が手分けをし 照 路
大臣が墓参に帰って来る 彼岸 鮫 虎 狼
お彼岸も間近か坊さん庭を掃き 哲 郎
彼岸詣り長男しようこなしに行き 葵 丘
お彼岸の混むパス花をかまし持つ 胡 風
彼岸花吐血で死んだ子を想い 秋 月
役僧のお腹が空つた お 中 日 飴 ん 坊
お彼岸が麦の追肥を急かせたり 宗 義
お彼岸を気付かぬ程にもうけとり 久 米 雄

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

残り酒寄せて意見の合う同志 早 苗
怪気炎あけて残り酒をくみ 栄 治

大雪が長靴はかせた河野さん 和 幸
大木になって大雪受けて立ち 鶏 声
大雪に川ひとすじが生きている 勇
今年こそ決る噂の義宮 昌
停年を今年は意識する 範 明 朗
古い大吉今年に期待持ち 冬 樹

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

過去はもう言わないこととして暮し 真 奇
真直に歩けば過去の影もなく あやめ
懺悔してしもうて神に導かれ 東 岸
銀婚になつても過去は秘めたまま 芳 月
出戻りの過去を世間が洗いたて のぶ子
悲しさをのらす過去に触れて通夜 宗 義
振だこがあり奥様の過去が知れ 伊 久 野
大物が過去の貧しさかくる逃げ 幸 仙
アルバムに上等兵の僕がいる 胡 風
ニコヨンが教べんとつた過去を持ち 安 兵 衛
記憶喪失過去をどこへ置き忘れ 秋 月
ふところ手儲かる話ばかりして 良 江
縄のれん頭で割つたふところ手 浄 美
ほは冠りかぶり直してふところ手 良 子
財布固うにぎつたドテラのふところ手 一 声
ふところ手あぐで子供に物とらせ 照 路
いいことはないかとふところ手に聞かれ 久 米 雄
かけひきがこころでほしい手を買ひ 正 州

川維 米子支部句会 (米子市)

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

青葉するころ何うという 便り 十面子
恋人の居る窓青葉にさえぎられ 三 郎
頂上へ遠く青葉に息をつぎ はる 江
口には出さぬが父も心配をし 勝 喜
心配をすてておけない娘の願い 天 花
連達がきて心配が一つ増え 斐 山
自炊する偏食ぐせの娘を案じ 利 子
自炊する隣へ煮豆届けさせ 勝 子
自炊する娘へ母の荷が太り 幸 葉
真一文字口を結んで手術台 鯨 太
発車ベル真一文字に突っ走り 義 夫
すねるだけすねて末っ子もうねむり 三 叉 路

小西雄々報

名物は不味いと子供遠慮せず 無 閑
株はもうこりたとマダム少しやせ 雄 々
雑音をのがれ落着く皇居前 一 保
豪雪の国を守つた自衛隊 詩 郎
死神と一緒にのぼる冬の山 鶴 丸
娘と話しすぐ終点に来てしまひ 虞 究
支払は明日だと断る椅子きしむ 天 邪 鬼
屑籠へ投資のしるべ封の まま 一 机
豪雪にあふれて今日も冷やで飲む 明 甫
春の陽は白一線を解かしゆく 祥 月
燃える火へ心の塵をかきあつめ みどり
豪雪に行商までが途中下車 たかよし
お隣の入試の噂を寝て話す 秀 峰
わが国旗出すに遠慮をする日本 すゝむ

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区深草町 5 (361) 9373 代

支局 東京都千代田区神田最寄町 2 (291) 9629 代

名古屋市昭和区村田町 2 (88) 9069

杏林川柳会 (大阪市)

中島生々庵報

寒まいる今宵も同じ犬がほえ 生々庵
寒まいる一町だけで帰つて来 無 名 林
護摩の火へ手をかざしたい寒まいる 阿 茶
寒まいる更けてもさすが法善寺 珊 枝 郎
寒まいる愚痴も話せる連れが出来 小 石
ひとり寝のこたつはなぜにも言われ 一 哲

一 哲

武者ぶるい信心たらぬ寒まいり 野迷路
寒まいり犬の足跡だけの路 瑞川
本読みがほしいせりふとなる初日 霞乃

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

人形だく子の寝姿に苦を忘れ 敏行
寝姿をチラッと見せて暮が下り 草右
寝すがたは子がないようなあどけなき 宏子
拾いもの無理な手術がうまくいき 春雄
肩書きを拾って定年近づけり まさる
つまらないものだけ届く拾い物 竹莊
次の間も割勘かして金を寄せ 没食子
課長でも割勘にする飲み仲間 幸男
割勘へ紅一点は除外され 愛論
教室の窓ひっそりと今試験 藍兒
あの窓この窓みんな違った夢を持ち かおり
寝姿まで神経を使えない娘 安紀子
浮気性に寝姿じつと見つめられ 竹志
ちさくちいさくなり母の寝姿や 路郎

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

時計見てあくびのまゝ切符切り 静幸
ベルの音改札口で気をもませ 勉
ただ乗りへ改札仁王のように見え 和郎
田舎駅花嫁がのるので打水し 国次
スキーヤー改札口で荷に気付き 句念坊
うどん喰べ終り改札握り占め 貴山
二人連ればかりで改札嫌になり 圭水

改札を出ると黙って荷をとられ 路郎

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

旅芝居次郎長茶店でカレー喰い 秀雄
アベックが茶店の奥を占領し 一平
団体が帰り茶店の昼支度 雅堂
結婚へ踏切れぬ娘の秘密 九紫
無駄足を折って仲人足袋を履き 一男
無駄足と知っても税務署だけは行き 繁三
紙ちらす鉄帯に追い出され 雄水
ステージの歌手紙テープよけながら 好祐
成るようになるさ気楽な火の車 辰始
気安さの気楽な客へ茶も入れず 京一

富柳会 (富田林市)

阿部柳太報

赤信号つければなしの衆議院 紅月
信号燈ついて無免許道をそれ 日出男
ボリさんが居るから信号破つた 尚史
お地藏さんどけて信号灯をつけ 周一
信号音途絶え衛星消えてゆく 白柳
木枯のそれより佻しい待ちぼうけ 美代
待ちぼうけおこって見た案じたり 宋一郎
すぐ行きますと言われホテで 待ちぼうけ 静林庵
待たしたらおこる言った待ちぼうけ 花梢
待ちぼうけへ嫌みも言えぬ程にほれ 雄声
初対面写真とちがうと仲人せめ 幸吾
初対面金策のメドやとたち きはち
初孫とガラス越しの初対面 八郎

方言をもて余してる初対面 六竜子
初対面もうライバルと意識する 呂人
初対面こんな夜だった雨だった 摩天郎

どんぐり川柳会 (羽曳野市)

古川静波報

新聞に結婚許すと親爺の名 周三
ほっとして朝刊をみる夕餉の膳 万竿
新聞を片手の食事妻は慣れ 千沙
いくとせを元気で働く子の宝 浪路
テレビ料理横目に秋刀魚でめしを喰い 百舌郎
初詣元気になることだけ祈り 和子
元気者一度病んでみたいと言ひ かつ子
上夜に病欠ばれる 駅前 恭順
近所まで来たついでに又借られ 愛之助
新社員元気良いのは返事だけ ひろし
駅前に佇ちふるさとを噛みしめる 治
駅前の工事が変える街の顔 よしゆき
人形が着れば特価もよく似合い 常人
駅前で泣かぬ涙を車窓で泣き きよし
産声はさすが俺の子わしの孫 草春
招かざる客にはテレビつけたまま 正太郎
駅前で夫に渡す子の成長 青春
人形のような女の値切る腕 しげる
失恋の痛手へ元気出せと言ひ みどり
近所へは全うけの良い亭主 痴亭
一年の労苦を匂わせ 菊人形 紀太呂
駅前で左遷の味を噛みしめる 静波
元気づけ元気づけられ行く人生 しずか
駅前で母が握らす肉緒金 弥生
職人形と言われ乙女の病み長し のん子
病みぬれば三十男も人形持ち 瞳

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

父親は要らぬと皆が皆で言う 薫風子
叱り役父がにが笑いていたり 民子
父という字のやさしさを思い書く 新子
父のいびきにあこがれを持つ 夢虹
友情のように母の亡い親子 すゝむ
五月人形無骨な父の無精髭 舟遊
友達言う程父はこわくなし 牧人
新緑へ図書館の屋根浮いて見え 九州男
灯を捧げ今日の無事を感謝する 六竜子
駅弁に旅の情緒をかみしめる 静馬
おぼろ夜の情緒黙って肩ならべ 民子
雑音のなかに情緒な詩が生れ 弦月
盃にゆっくりためている情緒 梅志
裏書きの墨鮮かに桐にのり 大丘子
桐箱に我が家の宝納められ 蕨風
マスコミの人氣へ芸が荒れ始め

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭

阿倍野区松崎町三ノ一〇

鮎の店

アベノ橋近地下食通街

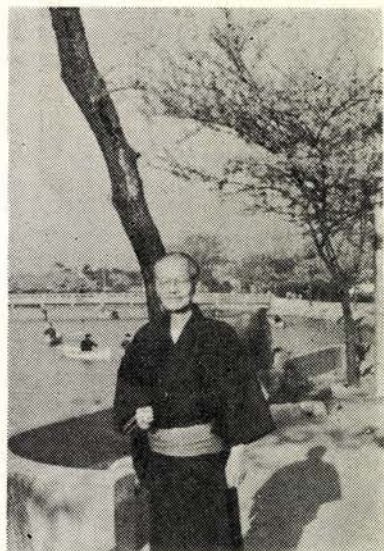
串の店

南区豊屋町三ツ寺センター

TEL(七七)三九三五番
TEL(七七)〇一四七番
TEL(三三)九一八四番

柳樽室

路郎生



万代公園は私の庭園だ。寸閑をぬすんで散歩する。それも月に二回。(路郎)

★春雨だ、濡れて行こうなどと思
うてるうちに、もう初夏の暑さで
ある。時候までがスピード化する
のであろうか。★知事の選挙、市
長の選挙も一応すんだのでヤレヤ
レである。

★中馬市長は文化の振興について
も公約の一つであるから、やがて
文化センターも生れるであろう。

★前号で古句研究家の岡田甫氏
が「川柳初篇研究」の序説とも
いうべき一輪講掲載に当って一を
発表され、いよいよ本号から輪講
をご愛読願う運びとなった。タイ
トルは私の好みで「川柳初篇研
究」とさせてもらった。これは曾
つて本誌に「武玉川初篇研究」か
ら四篇研究までの逐句解を、古川
柳研究の大家、梅本廬山、森東
魚、蛭子省二の三氏に十一年間に

わたって輪講してもらったタイ
トルと同形式をとらせてもらった
のである。廬山翁は東京で、東魚氏
は北京で、省二氏は愛媛県で何れ
も物故された。今回の輪講者はそ
の第二陣だけに、よりエネルギー
ッシュに古句研究の実を挙げて欲し
いとねがっている。輪講の主役は
古川柳研究家として古くから知ら
れている丸十府氏であるから巧み
にリードされ好読み物となるであ
ろう。★本号には不朽洞会副理事
長の若本多久志氏の「沖繩紀行」
を掲載することが出来た。事業の
暇を見て夫妻の旧婚旅行を沖繩プ
ームにピントを合わせたものの、
川維ハワイ支部長の築山快夢氏
も三月三日に羽田空港へ飛び沖繩
に出かけられ、九州、山陽、四国
を経て四月第四週の初めごろに来
阪される予定である。久しぶりに
会えるよこびは大きい。

★近來執筆陣が熱を帯びてきたこ
とは、読者とともによこびに堪
えないが、本号で相変らず原稿が
フクソウした。それがため富士野
鞍馬氏、河野春三氏等の玉稿をや
むを得ず次号へ割愛した。筆者な
らびに読者のご寛恕を乞う次第で
ある。拙稿の「窓口談義」も元氣
のよいところを見せたいと思っ
ていたが、これ又次号送りとなっ
た。

★川維「川柳まつり」がまた近づ
いた。本年で十回を迎える。既に
その準備にかかっているが例年以
上に盛り上がりを見せて欲しい。
昨年はひろびろとした四天王寺本
坊で開催したが本年は南地の中心
地で足場のよい北極星の四階で開
くことになった。エレベーターが
あるので老人組も安心して出席し
てもらえるだろう。日は七月七
日(日)である。今から出席の心
積りをしてほしい。詳しいことは
別掲広告をご覧ください。

★積み重ねていくものはおそろし
い。葎乃と私が結婚をして来年の
春で五十年になる。半世紀の社会
の変わり方がこんなにひどい変り方
をした半世紀なんて、これまでの
どの半世紀にもないのではないかと
思う。ふり返って、この二人三
脚がよくも続いたものだと思っ
ている。ところが不朽洞会の方で来
年は金婚の祝賀句会や記念事業を
やってやろうと一月以来、よりよ
り協議をされている。ところが、
どう間違えられたものか、三月に
祝吟、四月に祝電が来て、物に動
じぬ私たち夫婦が眼をパチクリさ
せられたのである。どう感謝して
いいのか判らぬので「あいや、お
のおの方、しばらくお待ち下され
い」と申し上げておく。

★人間というものは勝手なもの
で、仕事のない人はどんな仕事で
も欲しい。忙しい人は一寸でもレ
ジャーの時間を欲しがらる。私など
も、バカバカしいほどののんびり
した一ト時を欲しがっている。桜
が咲いても、近年では吉野とはま
るつきり無縁の徒である。私とし
ては二丁先きの万代公園を逍遙す
るに過ぎない。アワレと言うも愚
なりである。では次号まで。

☆五月句会―川維支部
☆明和川柳研究会・12日(日)一
時、題、メーデー・太陽・現実・
所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公
民館、☆京都句会・16日(木)

夕、題、緑蔭・印・菊弱・所、四
条親手仲源寺☆みなと句会・27日
(月)六時、題、茶店・雨・露
天、所、神戸市電相生町下車浜側
へ百米左側、神戸鉄道クラブ第一
会議室、☆かがみ句会・2日
(木)七時、題、予言・子供の
日・雑音・かき・連絡、★南海電
鉄句会・16日(木)六時、題、私
いもとし・劣等感・落選・所、難
波高架下親和クラブ、★阿倍野
句会・(真面吟行)19日(日)午
前十時、阪急梅田駅西側集合、会
費、二〇〇円、弁当各自持参、
題、緑・道・滝・吟行雑詠、雨天
の節は、20日、所、阿倍野区松崎
町三ノ一〇割烹大万。★玉造句会
・9日(木)六時三十分、題、菖
蒲・男の子・尊敬、所、市電玉造
南一〇〇米大阪信用金庫

麻生路郎著 好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年か
ら川柳を手がけているというから
川柳歴はもう五十五年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出し
ている「川柳雑誌」に掲載された
ものを中心にその他の雑誌や句集
からひろった五百六十三句につい
て、ひとつひとつ丁寧な注釈を加
えて、鑑賞の手引に資するとした

大坂市住吉区内万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇一八
振替口座 大坂 七五〇五〇

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁



精がつく薬



パント錠

副腎・肝臓強化

副腎に効くパント錠は
精がつきます。疲れがとれます。

疲労・中年過ぎの精力、体力の衰え
二日酔・肌あれ・アレルギー性疾患

30錠・50錠・100錠

川柳 親でころ子心

若本多久志著 麻生路郎選

価 150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親でころ子心を
詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である
登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に
深いものであるかを知ることの出来る実に有意義な書である。

東野大八著

風流 人間横丁

B6型二五八頁

価 250円
送費70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者
のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばし
るさまは凄い。まるで腕の冴えた板前の切れ味にも似
ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載
され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編であ
る。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物
としてお薦めしたい。

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B6型函入 定価三百八十円 送費九〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがそ
の持論は詩人の民衆的立場を要請した／今は柳界にあ
って庶民の詩人的自覚を促す／ここに川柳雑誌社が誘
る現代川柳批評家として世に送る／凡そ前向作家を自
負する柳俳人必読の書

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

川柳雑誌社

大阪住吉局区内
万代西5丁目25
発行所

振替口座 大阪 75050
電話 大阪 (671) 6081

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

余生 (十句以内) 大西八歩選
若さ (十句以内) 八木摩太郎選
品切れ (十句以内) 傍島静馬選
男まさり (十句以内) 西尾 栄選
潔白 (十句以内) 田垣方 栄選
立読み (十句以内) 木村十悟選
(六月十五日締切)

毎号募集

近作柳樽 (雜誌十句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (雜誌十句以内) 北川春巢選
文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
(毎月十五日締切)

投稿規定

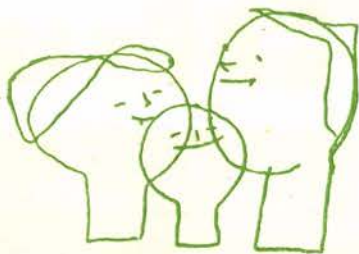
▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏
▼ 名推挙を明記する事
▼ 近作柳樽は一般作家の雑吟を募
る。課題吟は誰でも投稿が出来る。
川柳塔の投稿は不朽洞会員に限
る。

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第三十八年
定価 九〇円 (送料六円)

(禁転載)
半力年 五七六円
一力年 一〇八〇円
昭和三十八年四月廿五日 印刷
昭和三十八年五月一日 発行

大阪住吉局区内万代西5丁目25番地
編集兼発行人 麻生路郎
行印刷人 麻生路郎
発行所 川柳雑誌社
電話 大阪 (671) 6081
振替口座 大阪 七五〇五〇

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2



中外製薬



疲労回復
栄養補給に

グロンサン
バーモント

100ml 角びん...150円

<略名グロモント>

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・鳴咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、所界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価 二五〇円
送 七〇円

取次所

川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507



新和歌遊園

ロープウェイ

新和歌浦を一望におさめた空中散歩 高津子山へのスカイラインは四国淡路の連山も手にとるようです

料金 往復大人70円 小人36円
食堂 売店 駐車場 散歩道 他
和歌山市駅下車電車又はバス
回転展望台大人30円 小人15円

南海電車